東京立正女子短期大学

論 叢

第 五 巻

一目 次一

 反公害の哲学
 岩本経丸
 1

 開発途上国における教育の課題
 鍾 清 漢 24

 教授・学習過程の再考
 田島富美江 16

 日・英対訳の問題点
 近藤久美子 1

昭和四十九年

反 公 害 の 哲 学

岩本経

丸

日次

はじめに、

公害――文明史上の怪奇なパラドックス

とを憂えるのである。

えられることによって、体制にかかわる問題としてばかりでなく、産業のの環境破壊や、諸河川の急速な汚染の進行と、水資源の涸渇がしきりと伝本とにおいて特に顕著となったが、ソ連においてもバイカル湖とその周辺本とにおいて特に顕著となったが、ソ連においてもバイカル湖とその周辺な害は、最近十年間に急速に重大化し、しかもグローバルな問題となっ公害は、最近十年間に急速に重大化し、しかもグローバルな問題となっ

防除の構想を押進めるならば、抜き差しならない破局を迎えるであろうこだ。世界の科学者、技術者、政治経済学者達は、公害の発生機序の解明及た。世界の科学者、技術者、政治経済学者達は、公害の発生機序の解明及らだ。しかし、人類の福祉増進を目ざしてきたはずの近代科学・技術それ自身が生んだ怪奇なパラドックスともいうべき公害は、はたして科学(社会科学も含めて)と技術にたよる現実的方法だけで、その解明と防除が達会科学も含めて)と技術にたよる現実的方法だけで、その解明と防除が達会科学も含めて)と技術にたよる現実的方法だけで、その解明と防除が達会科学も含めて)と技術にたよる現実的方法だけで、その解明と防除が達会科学も含めて)と技術にたよる現実的方法だけで、その解明と関係を持つ全人類的問題と考えられるようになっ発展そのものと不可分の関係を持つ全人類的問題と考えられるようになっ

うのない外部不経済がますます積み重なるであろうし、これに加えて地球公害現象は解決されるどころか、逆に複雑化し、したがってまたペイしよさせるはずである。これは人の活動一切を含めた公理である。したがってとする新技術の開発が行われたとしても、その新技術は再び新公害を発生とする新技術の選発の生みの親は近代技術である。この公害を防除しよう

方を補完する洞察をはじめるべき段階にきている」と述べられている一節 二年ストックホルムで開かれた「人間環境に関する国際会議」の準備作業 の資源枯渇と、これに反比例して世界の人口爆発が進むことを考え併せた けているのはどうしたことだろう。 低次元の問題として見下しているのでもあろうか、依然として沈黙をつづ に立てこもり、観念的思考に慣れてきた哲学者たちは、この現世の現象を 間環境をより総合的にとらえる哲学を導入して、かつての狭少な物の考え バーバラ・ウォード女史両氏のまとめた報告書の中で、「われわれは、 として、ロックフェラー大学教授ルネ・デュボスと女流ジャーナリストの 正に哲学の問題に移行せざるを得なくなった。国連の主催によって一九七 題に発展し、科学・技術的問題として取り上げられつつある公害は、 ろうと懸念されてくる。今や公害は人間的存在の根本を問い直す深刻な問 の側から出たことに大きな注意を払わねばならない。しかし、孤高の立場 実に至言として傾聴に価する。しかもなお、このような発言が科学者 生態系や環境一般の崩壊はおろか、人類の終滅にまで発展するであ 今や

問題がどのように帰結するかを考えてみることにする。
にの定義をめぐる諸問題を仏陀的「知見」によって推考し、かつ、その諸とのようにとらえているか、言い換えれば、現代の知識人たちが「公害」を必ようとするものである。その糸口として、現代人の「知性」が公害をどめようにとらえているか、言い換えれば、現代の知識人たちが「公害」をどのように定義づけているかを明かにするこという開始したい。そして、どのように定義づけているかを考えてみることにする。

(1) 都留重人「公害の政治経済学」第一章第一節「ソ連の公害例――バイカル湖

の汚染」、同書三~一〇頁

(3)

は見えるようだ。 は見えるようだ。

例といえよう。 現代人が疎外され、規格化され、平均化されて自己を喪失しつつある主原因が 現代人が疎外され、規格化され、平均化されて自己を喪失しつつある主原因のといえよう。

頁。(日本総合出版機構出版、一九七二年)。 境科学研究所共訳「かけがえのない地球――人類が生き残るための戦い」六四⑤ バーバラ・ウォード、ルネ・デュボス編、人間環境ワーキンググループ、環

お人間ないし教育の原点との関連を持つ所説は見当たらない。誌「高校教育」の昭和四七年一二月号が「環境問題と教育」を特集したが、ないは環境問題はなお一度も取り上げられたことがない。全国高等学校長会機関が 哲学専門誌は勿論、代表的思想雑誌である「思想」及び「理想」に公害ある

って、深く無際に入り、一切未曾有の法を成就せり」と。「如来の知見は広大深遠なり。無量・無礙・力・無所畏・禅定・解脱・三昧あンした上に、了察・洞見を含めて成り立つ英知をいう。法華経方便品に曰く、ンした上に、了察・洞見を含めて成り立つ英知をいう。法華経方便品に曰く、

(7)

公公 害 0 概 念

(特に公害対策基本法第二条の「事業活動と人の活動」について)

ても、 ある。 宮本憲一、庄司光、金沢良雄の三氏の分担執筆になるものだが、 躍 するところは宮本憲一氏の筆になるその頭初の一節である。 害の爆発的現象の一面を語るよい語り草でもある。この新版の公害の項は れるまではこの項がなかった。ところが、一九七二年の再訂新版に至って の多くの国語辞典には、鉱害は載っていても、公害の項がないのが普通で も公害を体制的所産としてとらえている傾向は同じである。また、その他 て地域住民のこうむる人為的災害」と大きく表現が変ってくるが、いずれ 産業の発展等によって受ける諸々の被害」と記載されてくる。この記載も 一九六九年の改版に おいては、「公害 九六四年版にはこの項が 設けられ、「公害 公害ということばは、一九五五年初版の広辞苑にはまだ出てこない。 二万数千字を投入する大項目として取り上げられてくる。正に現代公 さらに、日本の百科事典の代表とも言ってよい平凡社版をとって見 一九六五年の改訂版に約二四〇〇字を用いた「公害」の項が新設さ 私企業並びに公企業の活動によっ 共同生活を営む住民一般が、 次に引用

る。 場し、大正期には、 水汚染・騒音・振動などによる環境衛生の悪化を総称するようになってい 「公害という法律上の用語は、一八九六年 しかし、公害が社会通念として、一般の民衆の日常用語として普及し ほぼ現代の公害概念と同じように、大気汚染・悪臭・ (明治二九年)の河川法に登

> い。」
> 「は、ておくれており、公害の概念規定にも諸説があり、に比べておくれており、公害の概念規定にも諸説があり、 たのは一九六○年代以後のことである。公害の科学的研究は問題の深刻さ 確定して い な

ここに引用した一節は、現代の公害現象が、 全身を急激におかす悪質の

伝染病のように、

急速に環境一般に及んでいった状況をよく表わしている。

欧米諸国にひろがっていったものである。英国ではニューザンス(安居妨 概念が追究され出したのは、正に一九六○年代以後のことであった。 害)という概念があり、法律上はニューザンスをさらに公的ニューザンス の定義を推すことができよう。氏は、「公害という概念は英国に端を発し、 対象として語られたものの代表としては、東京工大教授時代の清浦雷作氏 と私的ニューザンスに分け、公的ニューザンスが一般公衆に対する侵害! この六○年代において公害の定義に言及したもので、かつ、一般市民 公害ということばは必ずしも最近のことばではなかったとしても、

過渡時代を代表する定義であった。一九七一年にはこの改訂版が出て、大 念の定義づけの必要を認めない人もいる。」と述べているが、こ れ は正に または損害を受けている現象である>という見解が一般にとられているが、 定義として確立されたものはなく、法律学者の中には、公害という固定概 日本では<公害とは、不特定多数の原因によって不特定多数の人が迷惑 つまり公害という概念に相当するものである。

の一九六〇年中期を代表する清浦氏の一般にわたる見解につづいて、

きく増補が行われてくる

都留重人、野村好弘の二氏がそれぞれの著者の中で、それぞれの専門の立 米法のパブリック・ニューサンスやドイツ法のイムミッシオーンにもとず 場から公害の定義に言及しているが、その根本の考え方は同じで、共に英 従って、公害の概念規定には、なお問題をはらんでいるとしても、それを 清浦教授の解説の中にあるような状況は、僅か数年後の今日においては著 は既に、 革新都政といわれるものの中においてもなお、都留重人氏の指摘するよう ら回避しようとする姿勢が三年以上もつづいてきた。こうなってくると、 て不特定多数の車に責任をばらまいて、他の根源的発生源の探索をことさ りつつあるいわゆる光化学については、東京都の行政の中だけに依然とし の責任が明確に問われる時勢ともなった。ただ、この三年以来全国に拡が 病も、イタイイタイ病も、スモン病もその発生源が突き止められた上、そ をはかってきた従前の傾向も最早ゆるされなくなり、水俣病も、第二水俣 三に、公害発生源を「不特定多数」の責任にばらまいて、企業の責任回避 不必要とするような法律家は最早いなくなったことでもあろう。また、第 正によって、わが国の法的の定義は一応確定したと言えようし、第二は、 本法」の改正を経たことにより、また、他の十三の法律の新立法ないし改 しく変ってしまった。第一に、公害の定義は、一九七〇年に「公害対策基 に Immission の両概念の特徴に触れたいと思うが、いずれにしろ、この いて立論している。拙文では、その進行に応じて public nuisance 並び 数にあるとする見解が許されなくなり、科学的な分析と現実事例の解明が とする見解が定着したようだ。要するに、一般に公害発生源は、不特定多 な根強い資本主義体制の意図がにじみ出ているようにも思える。大阪府で 日本的光化学現象の主犯は工場と、石油を使用する発電所である

進むにつれて、特定少数の大企業がその主原因となっていることが、時とともに判明しつつある。日本においては、不特定多数の車といえども、トともに判明しつつある。日本においては、不特定多数の車といえども、トればならない。しかし、公害の加害者が次第に特定少数にしぼられつつあるとして変らない。すなわち、公害の加害者が次第に特定少数にしぼられつつあるとして変らない。すなわち、公害の「公」とは、各種の解釈があり、またとして変らない。すなわち、公害の「公」とは、各種の解釈があり、またとして変らない。すなわち、公害の「公」とは、各種の解釈があり、またとして変らない。すなわち、公害の「公」とは被害をこおむる公衆の「公」であ半谷氏の言うが如く、公害の「公」とは被害をこおむる公衆の「公」であると解すべきである。

(三)

政府は、昭和四〇年(一九六五)に「公害審議会」を設けた。翌四一年でものになったと評価してよかろう。であのになったと評価してよかろう。のものになったと評価してよかろう。で、一九七〇年暮にその改正が成立し、わが国の法的概念がいかけるように、一九七〇年暮にその改正が成立し、わが国の法的概念がいかけるように、一九六七年に至って、わが国の公害対策基本法の立法があり、それを追

十月にこの審議会は「公害に関する基本施策について」という答申を出し

たが、この答申の中に、公害の定義に触れた次の一節がある。

立証や受忍限度の判定に困難を伴うことなどが特徴であると言えよう。」のほか、動植物や物的資産に及ぼす影響を含むものであって、因果関係の影響を及ぼす現象であり、その影響は人間の心身や生活環境に対する影響影響を及ぼす現象であり、その影響は人間の心身や生活環境に対する影響

現の中で特に重要なところは「人間の活動として生み出される有害な影響この一節は、その後各所に引用される重要な箇所となったが、この表 0) 沢の三つに該当している。日本の公害対策基本法の「公害」の概念が、① とらえるのに不可欠の三つとしてあげる①発生源、②現象形態、 ぞれを代表するこの三つは、 もので、公害現象の最も根本をとらえている。この英・米・独・日のそれ 全辞典」の解説によると、「取り入れること」 (Einführung)、「持ちこむ 国会の修正を経て四二年七月二一日に成立、八月三日公布、即日施行され 成されていることは、 を健康と環境と財産の三様の被害としてとらえた上、この二者を含めて形 ンやエンヴァイアランメンタル・ポリューシの因って生ずる根源を突いた される有害な影響を与える現象」という概念は、さらに、イムミッシオ とらえた概念と言えよう。その後英米法概念のエンヴァイアランメンタル ってイムミッシオーンは、パブリック・ニューサンスの発生の前の過程 快な振動・熱・その他悪い状況を持ちこむこと」、と解説されており、 こと」(Einsetzung)であり、「清浄な自然環境の中に汚染物質・騒音・不 指す概念であるが、 を与える現象」というところである。英米法のパブリック・ニューサンス 元での発想と考えてよかろう。ところで、この「人間の活動として生み出 発生源を芯にして、 ポリューションがつかわれるが、この概念もイムミッシオーンと同じ次 わが国に周知のように、公害によって生じた生活妨害の一般的結果を この答申内容にも、 ドイツ法のイムミッシオーンは、グレッフの「環境保 正に妥当な把握と言ってよかろう。しかしそうだか ②の現象形態を七類型としてつかみ、 偶然にも都留重人氏が、公害の機能的な面 また、この答申にもとずいて起草され、 ③の被害状況 ③被害状 従 な

必要となってくる。現在では、「もらい公害」の発生源対策はお手上 げの行政地域からの「もらい公害」の区別を立てて、それに応ずる対策規定がれて、その中に@同一行政地域内に発生源を持つ「自家公害」と、⑥他のといえよう。たとえば、①②③の外になお④として「発生形態」が考えらた日本最初の公害対策基本法においても、なお多くの問題点を抱えていた

(四)

状態である。

ら、いわゆる東京立正事件が発生した。後日の追跡調査によって合計二五 「G 立法ないし改正を見るに至ったのである。 公害国会の召集となり、基本法の要点が手直しされ、 論は湧き、経済優先を根底においた公害対策が厳しく批判され出し、 大きく上回った。このような事件の突発とその後の被害の続発によって世 被害を受けていたことが判明し、都民の被害届出数に至っては六〇〇〇を ○名を越える生徒と教職員が目とノドの刺激、 療を受け、十一名が引続き入院し、このうち七名が重篤症状を呈したとい 名が救急車で、三名が教員の車で、二名が徒歩で六つの病院に送られて治 健室にはこばれたのをきっかけに、数十名の被害生徒が収容され、内三八 失するに至ったソフトボールの一女子選手が東京立正中学・高等学校の保 どめようもない流涙で顔面中をぬらし、はげしくせき込み、遂に意識を喪 った。昭和四五年七月十八日午後十二時十五分、全身をけいれんさせ、 この法律の問題点は、早くも三年後にきびしく問いただされることとな (当時の校長は私であった。) 頭痛、 他の十三の法律の新 吐き気、しびれ等の

5

らに「水底の底質の悪化」を公害の現象形態の一つとして追加した。 濁の句の下に「(水質以外の水の状態が悪化することを含む)」を加え、さ ためであった。さらに第二条の定義の条文中に「土壌汚染」と、水質の汚 は出来上った。それは次の如くである。 基本法の成立公布、 して、四○年設置の公害審議会が行った答申、つづいて四二年の公害対策 について全面的検討を行い(中略) 定がともすれば経済優先と誤解されがちであることにかんがみ、 する」が全面的に削除されたことにあるが、この削除の理由は、 生活環境の保全については、経済の健全な発展との調和が図られるものと さらに四五年の改正を経て、今日の如き第二条の定義 福祉なくして成長なしの理念」を貫く 目 「この規 1的規定 かく

『この法律において「公害」とは、事業活動その他の人の活動に伴って『この法律において「公害」とは、事業活動その他の人の活動に伴って、となきむ。 第九条第一項を除き、以下 同又は水底の底質が悪化することを含む。 第九条第一項を除き、以下 同又は水底の底質が悪化することを含む。 第九条第一項を除き、以下 同又は生活環境に係る被害が生ずることをいう。

ものとする。』 ならびに人の生活に密接な関係のある動植物及びその生育環境をも含むならびに人の生活に密接な関係のある動植物及びその生育環境をも含む

(五)

人氏の言う①発生源、②現象形態、③被害状況の三つにわたって、おだや改正公害対策基本法第二条の「定義」では、既に触れたように、都留重

問題一九六八~六九年シムポジウム」の講演集の著名な十二論文の翻訳者 的な安易な楽天観と傲慢な世界観の中にひたってきた人類は、今日の科学・ のものの発生が、人類の不幸であることは言うまでもない。なおまた「人 らない。これが公害克服の道として、遠いがしかし究極の道となろう。 いない。現代人は正に謙虚に「人間的存在」を重ねて問い直さなければ と書いているが、この十二論文を読んだ者なら何人も同感を深めるにちが 自然を征服するのではなく、自然と調和することによって生きていく…… はいるとしても、マスターとしてではなくマネージャーとしてであること、 の根底に哲学がなければならないだろう。人間は神から世界を委せられて である川口正吉氏が、「訳者のあとがき」の終りに、「しかしあらゆる施策 さねばならない時に立ち至った。エール大学林学部で行われた「環境危機 技術の時代において、再び「人間的存在」の根源について真剣に問いただ これこそ公害問題の原点をとらえた重要な一言である。十九世紀以来西欧 の活動」とは何を言うかについては多くの問題をさしはさむ人もあるが、 かし、こういう評価がいかに高くとも、こういうことを必要とする事態そ の三つが含まれたこと、等によってまず画期的のものと評価されよう。 七領域を定めたこと、またさらに被害状況の中には健康・財産・生活環境 ない一般的なことばで併記したことと、さらに現象形態では大気汚染以下 えた一面において、現実の具体的な面を「事業活動」という体制的色彩の べきであろう。特に、発生源については「人の活動」として本源的にとら かではあるが、 しかし全面的に規定が行われたことには大きい意義を認む

② 清浦雷作「公害への挑戦 ――一億人をむしばむ文明のガン」(一九六六年)(1) 一九七二年改訂最新版「世界大百科事典」第十巻四三~四九頁。

- 6 -

三三~四頁。(一九七一年には約百頁を増補した改訂版が出ている。)

都留重人「現代資本主義と公害」(一九六八年)三五頁 野村好弘「公害と法の知識」(一九七〇年)一頁

である。 害を起こす原因物質の究明を、今日に至るもなお手をつけず、怠ってきたこと 即した科学的究明を行わないで、ロサンゼルス的光化学現象が東京の空で起こ るか起こらないかの究明に終始してきた結果、東京立正事件以来引続いて発生 東京都は重大なあやまちを二つ行ってきたと思う。その第一は、東京の事実に の二、その三)によって、都の公害局はまたまた「車主犯説」をくり返えした。 したしびれ、けいれん、呼吸困難、意識喪失等のロサンゼルスにはない重症被 昭和四八年八月公表の「大気汚染物質排出係数算出調査結果」(その一、そ 昭和四五年七月一八日の東京立正高校の夏型東京スモッグの被害事件以来、

明し、また対策を立てようとして きたことである。 〈空には都県をへだてる何 物もない。) 処置をとる努力を怠り、都内だけの研究調査をもって夏型スモッグの一切を説 第二のあやまちは、隣接県(特に夏期の神奈川県)との協力調査や共同行政

(IIII to ARTE O D + TH + C)

は心因性のものだ。」というのが、各区の保健所長の共通見解にまでなってしま に市民意識までがゆがめられ、「車さえ取締れば東京スモッグは解決する。重症 出される複雑な汚染大気を無視した非科学的行政が強行されてきた。このため れてしまった。そして、南ないし南東の徴風下で、横浜・鶴見・川崎・大田・品 なく、心因性、運動負荷のかかりすぎ、特異体質等の自己責任によるものとさ ・東京各区にわたり大工場と雑居の東京湾西岸メガロポリス一帯からつくり た。(昭和四八・五・一七杉並区浜田山会館における杉並西保健所長の発言。) この結果、被害発生以来百名を越える重症者は、公害によって生じたのでは このような二つの怠慢と、都が過去三か年、機会あれば繰り返してきた「車主

生源と移動発生源だけに限られた調査結果の報告であるから、その範囲内にお

隣の川崎・鶴見・横浜の大工場地帯からの汚染大気

が発表した「大気汚染物質排出係数算出調査について」は、都内だけの固定発

日本の

いては正しいであろうが、

犯説」との間には、何かの関係がありそうだ。昭和四八年八月に東京京公害局

れも水俣病やイタイイタイ病の過去の歴史の如く、いつかは正体解明の時がき HCと NOx だと主張するのは片手落ちであり、また如何にも不自然である。こ て、行政の愚が告発されることであろう。 の流入を無視して、夏型東京スモッグの発生の寄与物質は、都内を 走る 車

「日本資本主義と公害」 都留重人「現代資本主義と公害」(一九六八年)一六~三四頁、第一章の2、

大阪府立公衆衛生研究所公衆衛生室長中島泰知氏来信「大阪は、工場主犯

(7)した。もっとも実行はこれからですが。」(昭和四八年八月一八日) わゆる大阪府のビッグ・プラント(汚染防止低減プラン)となって実を結びま 車従犯をようやく行政レベルに定着させることが出来ました。このことが、い この表は、運輸省自動車局監修になる最近の自動車の台数調査であるが、

欧

車種別の自動 自動車台数	カ車台数 対は毎年増加し ,		昭和47年3月3 5台をこえた。	
車 種	自家 用	営業 用	計	構成比率
バス	(台) 112,712	(台) 84,141	(台) 196,853	(%) 1.0
乗 用 車	7,947,090	226, 292	8, 173, 382	38.5
∫普 通 車	80,153	2,934	83,087	
小型 車	7,866,937	223, 358	8,090,295	
トラック	5,405,713	386, 136	5,791,849	27.3
(普通車	594,926	277,770	872,696	
小型4輪車	4,720,081	84,129	4,804,210	
小型3輪車	82,692	7,567	90,259	
被けん引車	8,014	16,670	24,684	
特種用途車	219, 364	46,332	265,696	1.3
大型特殊車	138,520		138,520	0.6
小型2輪車	220,081		220,081	1.0
軽 自 動 車	6, 436, 334		6, 436, 334	30.3
(4輪乗用車	2,741,902		2,741,902	
4輪トラック	3,056,852		3,056,852	
3輪トラック	94, 266		94, 266	
2 輪 車	543, 314		543, 314	
計	20, 479, 814	742,901	21, 222, 715	100.0

約十四分の一、フランス約六分の一にすぎない。(昭四六年一二月現在)約十四分の一、フランス約六分の一にすぎない。(昭四六年一二月現在)また。この表の中で事業活動に関係する車、バス・トラック・特殊用途車・である。この表の中で事業活動に関係する車、バス・トラック・特殊用途車・が超国と比べて非常に異っているところは、事業活動用の車が非常に多いこと州諸国と比べて非常に異っているところは、事業活動用の車が非常に多いこと

- について」。 ⑧ 中央公論一九七○・五月号、一一二~一二五頁、阿部斉氏論文「公害の<公>
- ② 中央公論一九七一年三月特別号、一○○~一一四頁、建元正弘氏論文「公害)の中央公論一九七一年三月特別号、一○○~一一四頁、建元正弘氏論文「公害
- □ 半谷高久「公害の克服」(一九七○年)三頁。
- 一〇頁ならびに次の頃の註参照。 この前後の経緯については「公害概論」一九七二年、環境法令研究会編五~
- 段の一節である。答申日時は四一年一○月七日。載されており、相当浩瀚なものである。ここに引用したところは二九八頁の下載されており、相当浩瀚なものである。ここに引用したとこ○九頁にわたって掲出、この答申文は、戒能道孝編「公害法の研究」二九七~三○九頁にわたって掲
- Bruno Gr\u00e4ff/Herbert Spegele: W\u00f6rterbuch des Umweltschutzes, Seite 59
- 都留重人「公害の政治経済学」三一頁。
- 七名であった。
 から重症に移行した、ないし、重症症状を発した者が三名あり、重症者は合計から重症に移行した、ないし、重症症状を発した者が三名あり、重症者は合計は、当時の報道では、重症四名と報告されたが、これは急性症状の者で、他に後
- 高校及び鶴川高校におけるアンケート調査成績」参照。
 二二一~二三九頁「光化学スモッグの人体影響に関する調査─東京立正中学・二二一~二三九頁「光化学スモッグの人体影響に関する調査─東京立正中学・昭和四五年七月、八月朝日新聞縮刷版、及び、東京都公害研究所年報第三巻、モッグの被害体験とその事後処理の報告、及び、当面の問題点について」参照。
- (18) 野村好弘「続・公害関係法令・解説集」一一頁。

- ② 同上巻末「訳者あとがき」六頁。 ② 同上巻末「訳者あとがき」六頁。
- 二、人間的存在の内実としての「人の活動」

(その本質――西田哲学でいう「矛盾的自己同一」)

-)

この「人の活動」という重要な一句が基本法の定義に取り入れられるに至っ がある。 企業活動とは、 人の活動の組織化であり、 機械化であり、 化に外ならない。従って「人の活動」は企業活動の根源形である。公害の くかつ本源的に「人の活動」としてとらえたところである。なお公害審議 ているのは、発生源を単に企業活動とか事業活動に求めるだけでなく、広 比べて、著しく特徴的である。しかも、その特徴に最も大きい意義を与え たことは、英米法の public nuisance が被害状況に焦点を合せているのや、 頭に「事業活動その他の人の活動に伴って生ずる」ものという一節をおい たのには、公害審議会の答申が大いにあずかっていたとおもう。この点は よって公害問題の根本的解決の糸口が開けたとさえ言えよう。ところで、 定義にこの一句が入ったことによって、公害問題は存在論と密接に関連し、 は「人の活動」として単数的に一層本源的に表現されたことには特に意義 会の四十一年答申中の「人間の活動」という複数的表現が、この法の中で ドイツ法の Immission が主として公害の現象形態を取り上げているのと 人間存在の根源を問い直そうとする哲学と結びつくことになった。これに 日本の公害対策基本法が、公害の定義を発生源を中心にとらえ、その冠

なるものと、企業や産業一般を含めた「事業活動」について考えてみる。審議会の卓見であり、功績であった。以下に存在論的立場から、「人の活動

(=)

己は歴史的でなければならず」、そして、「歴史は制作であり、 両面の価値の上に成り立ってきた。 な芸術活動となってあらわれ、またいわゆる名人気質、 必ず組織化されるものであり、 とき、これを事業活動と名付けてよかろう。広辞苑によると、 社会的意図を持ったとき、ないしは、社会的協力や組織化の下に行わ る」のであって、これが人間ないし人の「在る」ことの真実なのである。 ているものは歴史であるが、その歴史は常に興亡の一連の過程とその正負 像として静止した存在であったことはなかった。特に人間を人間たらしめ 組織的・社会的であれ、 体論と訳された時代があった。しかし、人間的存在は、それが個的であれ る」のスタティックの面で追及され、かつては Ontologie, ontology 人間的存在の内実は「制作的、 「一定の目的と計画とに基づいて経営する経済的活動」とあるが、それは 再び発生の過程とその循環の中で果たし得てきたもので、決して一つの ・リシャ哲学以来、人間的存在は主として「…… である」、「…… があ 制作ないし創造は、 それは多く、 原初の時代からダイナミックな発生・成長・消滅 現代では機械化を離れては存在し得ない。 創造的活動」である。そして、この活動が かつては、主として優れた個人の内面的 ゆかしい信仰生活の営みや、 西田哲学の表現を借りれば、「真の自 職人気質等によっ 事業とは ユニー 創造であ が本 れる

という。一 明暗・遅速等の相反する両面につきまとわれて成立する存在である。 この巨大化についてはしばらくおくとしても、 知恵と、このような危機に臨んでの自若さとが、 盾であり、 内にあって、紙一重の差でマイナス面を制御し克服しつつ、常にカタスト 得る「対」の概念である。西田哲学はこれを名付けて「矛盾的自己同一」 富は貧と、等々の如く相対的に成立し、その他正邪・曲直・善悪・美醜・ 作品は成立しない。精神的な芸術的な作品といえども生命と素材の消耗 有は生ぜず、何かを材料として破壊し消費し廃棄物を出さなければ一つの 破壊という反対のないしマイナスの現象を伴っていることである。 活動に共通の現象は、その制作と創造の反面に、 ぱら目先の功利と享楽に堕してしまっている。 俗なこのみの投映となりはてて、著しく内面性ないし精神性を欠き、もっ て行われる職業的制作においても同様であった。だがしかし、現代におけ 在を支える柱であったと言えよう。このような精神的支柱は、 ロフィー の比較対照の上で成り立つとともに、矛盾対立のあることによって成立し もこれ等の相反するそれぞれの面は、それ自身単独ではなり立たず、 矛盾的自己同一である」。またそれぞれの存在においては、 上になりたつ。そしてその個人の「身体的生命といえども、 れた事業活動は、 る「人の活動」は、 の淵に立って苦闘を続ける存在である。 どこまでも労苦である」のである。この労苦をしのび超克する 個の個人としての人間的存在は、このような矛盾的自己同一の 個人的活動の何千倍かに能率化され巨大化されてきた。 多くは社会的・経済的な欲望の、 しかも、 一切の人の活動ないし事業 かつての個人の人間的存 かくして一生命は自己矛 常に何かの消費・消耗 また時には大衆の低 組織され機械化さ 若さは老いと、 しか

学の法則が古い宗教や道徳に代って人間的存在を全面的に支えようとして ようなものが存在するであろうか、また存在し得るであろうか。 宗教・道徳・芸術等であるが、現代の事業活動ないし企業活動の中にこの これを支える力となり得るであろうか。 いるようだが、科学が果たして精神のダイナミックな機徴にまで触れて、 新しい科

る」と。そうであるとすると、人の活動を組織化し機械化し拡大化したこのは、からであるとすると、人の活動を組織化し機械化し拡大化したこ動かし我が物を動かし、矛盾的自己同一として世界が自己自身 を 形 成 す は、 その組織化と機械化と拡大化の規模に応じて巨大なものとならざるを得な うのは我々が物をつくることであるが、物は我々にとって作られたもので 文化や人造環境は、 文化環境の改変と破壊を大胆不敵に実行してきた。 なり、単純浅薄な考え方に立って、 なっていく。また、 会の持つ矛盾的自己同一の内実は著しく精神性を欠き、 とによって成立した現代の事業活動がつくり出す矛盾的自己同一もまた、 る。 ありながら、どこまでも自立的なものとして逆に我々を動かす、 ならず我々が物を作る働きそのものが固、 動に観察を転ずるにあたって、再び西田哲学の示すところを省 みて み た 次に、「人の活動」の組織化であり機械化である事業活動ないし企業活 常に経済的な欲望の充足が直接・間接に働いている。 しかも現代人の生活活動が組織化され機械化され拡大化される動機に 物と我とはどこまでも相反し相矛盾するものでありながら、物が我 彼は言う、 「歴史的現実の世界は制作であり、創造である。 各種の矛盾を作り出したことによって、 精神性を失った近代人は、不遜な世界観を持つように 人間を取り巻く自然環境の征服や、 物の世界から生まれるので しかし自らの作った新 物質的な矛盾が重 それ故に現代社 われわれの存 制作とい しかのみ 旧 あ

> は断罪されようとしている。 系の崩壊から人類の滅亡をも懸念させるまでになった。 動をつづけてきた各国企業は、 害の発生をも憂えさせつつある。国際的に何等の統制を受けず、 破壊的逆作用の数々を人間社会の中に持ちこみ、予測しがたい人為的 会的不自由、 在をおびやかしつつある。現代における人倫の崩壊、 活動によって、 日毎に増大する汚染物質や廃棄物質、 自らが制作し創造したものから統制され支配され、 新時代の事業活動を支える柱は立つどころ 人間を始め生物界一般の調和を破り、 騒音•振動• 人間疎外、 自らの制作や創造 悪臭等 自由な活 新たな社

0

か、

事業活動そのものが自らの活動を倒そうとしている。

米一辺倒の日本思想界が犯した百年の過失に気がつかない現状では、 仏教の「知見」の伝統を多少とも継いだ日本思想界であるが、維新以来欧 P あやつられた組織的営みが、一時はどんなに成功したように見られようと 体質から言って将来も育つまい。若し育つところがあるとすれば、それは ムの流れを汲む社会にはこのような知恵は育ってこなかったし、またその ことから生じた破滅であった。そして残念ながらヘレニズムとヘブライズ 自己同一を解決する知恵を欠いていたか、または予見する能力が チス党やファシスト党等の覆滅は、悉くそれ自身の中にはらまれた矛盾的 いる。かつてのポリスの崩壊、ローマの衰亡、近代絶対主義政権の没落、ナ 歴史をかえり見れば、 自ら生みだしたものによってきびしく制裁を受けた事例に充ち充ちて 衝動的な活動、 無反省な行動、 目先きの

L

われわれが未だ達成できなかったよいもの、

ひたすらに羨望の的であ

マックハーグ教授の「日本人は西洋の長所を少量に欠点を大量に吸収

ペンシルバニア大学計画学部長イアン・

L

それを求めるのは無理であろう。

事業社会の進むべき目やすが求められよう。の伝統以外にはないはずだ。ここには、今日の日本ばかりでなく、世界のの「知見」にもとずき一四○○年の文化活動の中できずいてきたわれわれ教授が言う「ひたすらに羨望の的であった文明の成果」なるものは、仏陀った文明の成果を棄ててしまったのである。」ということばは至言である。

(三)

投からはみ出す難問題となった。
おからはみ出す難問題となった。
おからはみ出す発信的自己同一は、今までの宗教・道徳の知恵のの知恵によって克服されてきた。しかし、現代の組織され機械化された巨の知恵によって克服されてきた。古代から、個人や素朴な社会に生じる矛盾的自己同一は、個人の優れた知見の判断により、あるいは、宗教や道徳の知恵によって克服されてきた。古代から、個人や素朴な社会に生じる矛盾的自己同一の中の内部現代社会では、事業活動(企業活動)に伴う矛盾的自己同一の中の内部界の方式を表示されています。

引かれるという、 史、言いかえれば、 必然的に、だが徐々に解決されてきた。 ト教的世界観では、 として表面に出てきたと言えよう。 ていくにつれて、矛盾的自己同一の内容は複雑さを加え、 この矛盾的自己同一の解決は、一面においては神話的な伝承や宗教的信仰 またわが母として親しんできた。そらいら時、あるいはそらいら社会では 古代の人びとは、 他の面では自然の見えない摂理の手により、 人間の外なる正邪の二元との関係としてとらえてきた。 人類の制作と創造の活動内容が次第に分化し高度化し 自然に対し、 人間が一 面において神を信じ、 これを畏敬し、 この重要問題を、 しかし農耕文明が熟し、 あるいは恐れ、 他面において悪魔にに ユダヤ教的・キリス 存在の重要問 因果応報的に 人類の歴 あるいは

> 井伯寿先生の次の如き解説を借りてみる。 仏教の道に求めることができよう。この五停心とはどのようなものか。 標を具えた人類の大道がある。この大道は、「五停心」として集約され れてきたが、決して行づまったのではない。 の超克をはかろらとする努力を積んできた。この道は現代人からは忘れ 来一つであることをさとり、人と自然との瞑合調和の中に矛盾的自己同 これとは対照的に、 人間が内なる知見を開発し、 仏教的世界観では、 自ら人間と自然の本性を究め、 人間を含めた自然を一元と考え、 むしろここには、 この二者の本 素晴しい 字 道 た

摩他(Śamatha)即ち止、を修する五種の方法であるが、止は定の異名と法をなして、心の五種の過を停止するをいうのである。この五停心観は奢 差別観 心を治するをいうのである。」 持息観と称せられるが、心の散乱する衆生が出入する息を数えて、 そこには実我はなしと観じて、 水、火、 生が諸法因縁生を表わす十二因縁の理を観じて、 観じて慈悲の念を起こし、もって瞋恚を治するをいい、 心を治するをいい、慈悲観は多瞋の衆生が一切衆生をすべて父母であると せらるるものである。不浄観は多貪の衆生がその身の不浄を観じて貪婪の 「五停心とは、 (引用者註、 風、 空、 識の和合であり、 不浄観、 界分別観に同じ)は著我の衆生が、身心はすべて地、 慈悲観、 我に執着する見を治するをいい、 それは因縁仮和合のものであるから、 縁起観、 界分別観、 愚癡を治するをいい、界 縁起観は愚癡の衆 数息観の五 数息観は 散乱 種 0 観

と言えよう。すなわち、① は貪(とん――環境汚染の因をなすむさぼり)人間が犯す五つのあやまちを戒めて、人間を正道につかしめる教えであるるて、字井先生のこの解説を更に現代的に解釈しなおせば、五停心とは

その出発点となるものが「不浄観」である。 選択と実践の「意志の修練」を教えるところにある。これが仏教の積極面 起する宇宙の理法をよく知り、 の裏の教えとでも言えるもので、その表となるところは、 そういうあやまちを犯すなと教えていると言えよう。しかし、これは仏教 あると考えて、 に暗い無知)を、 を、 を生み出す可能体であることを観ずるとともに、 ものの裏は不浄のものであること、その身体は様々の不浄(すなわち汚染) 除すべきものを教えているのが、の五停心として集約された教えであり、 ないしは表の教えと言ってよかろう。 いう「知見」を、⑤に、以上の四つを自ら修得し実行する主体者の正しい 原点を突くものである。 ろではこの不浄が益々増長することを戒しめたもので、現代の公問害題の ②は瞋(しんー 実践し、完全に身につけるには、まず裏において「してはならないこ あってはならないもの」をきびしく排除しなければならない。この排 ②に博愛平等を真実に実践するきびしい愛の「慈悲」を、③に因縁生 五魔というような道のさまたげをなす心の乱れ)等の五つを戒め、 感謝の心をもって天物を粗末にせず、「知足」の心で生きること これに執着するあやまり) ④は我執 -平和を害するいかり)を、 (がしゅら) かつ、似に人間存在の真実を見きわめると しかし、この表の教えを受け、学 を、 自己の身体の中に実体的な我が 不浄観とは、人間的存在その ⑤は障道(しょうどう) ③は愚癡(ぐちー 無反省な欲望が働くとこ (1)に無駄な消費 -理法

(四

五停心観の導入部をなす不浄観は、今日のことばで言い直せば環境汚染

球

の破滅をも憂えさせる今日を招来してしまった。

人間的存在は、

発生の最も根源的な素因ないし要因を指摘したものと言ってよかろう。これをさらに西田哲学的に言い換えれば、人間的存在の根底をつくっているまた、時々刻々に汚物と廃物を排出しているものであるが、貪欲のつのるまた、時々刻々に汚物と廃物を排出しているものであるが、貪欲のつのるまた、時々刻々に汚物と廃物を排出しているものであるが、貪欲のつのるまた、時々刻々に汚物と廃物を排出しているものであるが、貪欲のつのるところや反省のない生活ではその不浄すなわち汚染は益々甚だしく現われるとする。このように人間的存在の問題点をとらえて、人に反省と自戒を含とする。このように人間的存在の問題点をとらえて、人に反省と自戒を含とする。このように人間的存在の問題点をとらえて、人に反省と自戒を含とする。このように人間的存在の問題点をとらえて、人に反省と自戒を含とする。このように人間的存在の問題点をとらえて、人に反省と自戒を出するとする。このように人間的存在の問題点をとらえて、人に反省と自戒を出する。

争に走り、大は国際間民族間の戦争を起こし、 だ外に向けてきたホモ・ファーベルとホモ・エコノミクスは、 が忘れてしまったことは、反省されねばなるまい。 否定するのは今日においては当然だ と して も、「内なる神」(仏教でいう に公害を生む失策を犯した。勿論、神話的発想にもとずく「外なる神」を しく起こった科学と技術への信仰のためにキリスト教的神を事実上否定し、 近代に至るまで神中心主義(theocentricism)を奉じてきた欧州人は、新 や人倫関係の破壊をも引起こしつつある。 な自然征服の行動をつのらせることとなり、その後を追った日本ももろ共 「仏性」)と、 人間中心主義(anthropocentricism)に立つに至った。その結果は無反省 近代西欧文明は、 仏教で説くような自然との一体観や自然への畏敬を現代人 仏教のこのような見方と正反対の方向に進んできた。 その結果が、 環境は勿論のこと意識内容 欲望を解放し、心をた かけがえのない 小は権力闘 地

目的欲望の故に各種の危険に引き込まれつつある。このような人間的存在 の根源問題を突き、大きな戒めを提示しているのが次節で述べる仏教の不

浄観である

同じ点を指摘している。(六巻、八五三~八六八頁。) 前節の③参照。また戒能通孝氏も「ブリタニカ」日本語版の「公害」の項で

あり、「ひとのことに干渉してもらいたくない」の「ひと」は「私のこと」を 語である。従って、一個の他人を表わす「ひと」とも、一個の私を意味する 「ひと」ともなる。「ひとに迷惑をかけないようにせよ」の「ひと」は他人で 「ひと」は一つの「ひと」から出たことばで、一個の人間存在を表わす根源

害審議会」設置、翌七月中旬発足(長は和達清夫氏)。 昭和四〇年六月二六日の政府閣議によって、厚生大臣の諮問機関として「公

西田幾多郎全集(岩波)、第九巻九~六八頁「人間的存在」。

(5)同書一六頁

(6)

(7)

(8)対立させ、後者では人の「力への意志」(Wille zur Macht)を高め、遂に「自 然の征服」なる考え方を育て上げてしまった。 西欧文明の根底をつくってきたこの二つの「H」は、前者では自然と人とを

におさめられた第二論文「われわれのはまり込んだ苦境」五一頁 ハロルド・W・ヘルフリック編、川口正吉訳「環境の危機」(一九七一年)

字井伯寿「仏教汎論」二二七~八頁

七一頁の解説より 象に注ぐこと、とも解せられる。中村元監修「新・仏教辞典、二一七頁及び二 訳される。さらに、心を練って一切の外境や乱想に動かされず、心を特定の対 心を向けて精神を統一し、乱れない心の作用及びその状態)の七つの異名の中 | 六番目で、邪念が静止した状態を意味する。また「正受」(しょうじゅ) とも 「止」は Samatha の漢訳。唯識了義燈によると「止」は「定」(ある対象に

> (12) 右の山の解説中の「定」のくだりを参照

三、 矛盾的自己同一の負の極を突く 仏教の「不浄観

する両極を「自己自身を消すことによって生産する」、あるいは「死する 消す・死する・否定する等を「負の極」と名付けるとすれば、人間は常に る生産・生まれる・現われる等を矛盾的自己同一内の「正の極」と呼び、 よって新たな物が現われる」等々と表現している。これらの表現に出てく ことによって生まれること」、あるいはまた「自己自身を否定することに 西田哲学は、人間的存在を矛盾的自己同一としてとらえ、その矛盾対立

れが気づかれだした。ところで、人間がこのような否定に接したとき、さ だ。十九世紀にそだった「進歩の思想」は正にこれである。それが、抜き として目覚め、生命活動の中に現われる正の極の「無常」やたのみがたさ らにその「否定の否定」をする道を発見することこそが人間にとっての大 きた。また必ずしも古い宗教ばかりでなく、現代の実存哲学においてもそ ろう。かつて古代の宗教では、常に死・苦・罪・責等の否定の面を説いて たことは、正に深刻な危機感が人類全般の中に行き渡りつつある証拠であ について悩みはじめるものである。「青い地球は誰のもの」 が叫ばれ出し 差しならぬ負の極に追いつめられて危機を感じだしたとき、はじめて愕然 正の極だけが人生そのものだと考え、負の極を忘れ、ここでの出来事は他 人事か、さもなければ自分とは無関係であるかの如くに錯覚しているもの

さらに否定するところに真の「生」が生まれる。は「苦」として、形而下的には「不浄」としてとらえている。この否定を負の面、すなわち否定の面を「原罪」としてとらえ、仏教では形而上的に教的にこれを表現すれば、人の救済が実現される。キリスト教では人間の事であって、このときに人間の人間らしい生きがいが取りもどされる。宗事であって、このときに人間の人間らしい生きがいが取りもどされる。宗事であって、このときに人間の人間らしい生きがいが取りもどされる。宗

=

間に当然受け継がれることによって生ずる宿命的罪として受けとめ、これ の負の極を、 れは表面の形式にとらわれるからであって、 代の人間は、こういう神話的発想を受け入れようとはしないが、しかしそ ることによって、 をつぐなうためには、ひたすらに神の恩寵を信じつつ、さん悔滅罪をはか ことにおいて、永遠に変らない真実をとらえている。 いている。 原罪という考え方は、旧約の創世紀から出ており、神話的発想にもとず 「原罪」(Erbsünde, original sin) と呼んだ。そして、この宿命の原罪 人祖アダムが神の命に背いたことによって犯した原初の罪が子孫の人 パウロやアウグスティヌスは、 言いかえれば万人が持っている人間性の限界点を突いている 自らの救いが求められると説かれてきた。今日の科学時 人の矛盾的自己同一の否定的 原罪説が、矛盾的自己同一内 面

として否定した面をさらに否定するため、換言すれば、人生を改めて肯定出来上ったものが、前節で述べた五停心である。この五停心は、人生を苦そして、この解明の結果をまとめて諸人を正しい悟りに導く方法論として間条件をも含めて、人間存在の哲学的解明を果たしたのが仏陀であった。この原罪説とは対照的に、また、それよりもはるかに早く、形而下の人

古代世界に生きていた諸人に戦慄を覚えさせたものは、

を、 いる。 置かれて、これが繰返えし要求されていることは、 の数息観はその基本的態度作りを示すものと言える。早島鏡正師は、これ 的内容があるものではない。すなわち不浄観は、人間的存在の矛盾の一面 性と常時排泄する汚染物を指摘し、かつ、いましめるだけであって、 と目的とを持っているが、一番目の不浄観は、 すなわち慈悲観、縁起観、界分別観、 一つを暗示しているといえよう」と、この点に対して一つの解釈を与えて 記の二、三、四の三つの教説への導入をはかる方法の役目を果たし、 を知ることによって、人生への身構や態度をつくり直し、これによって上 し直すための知恵を説いている。この五つの中の二番目以下の四つの 「従って、 阿羅漢果の発得に至る信行道の一番最初に、不浄観修習が 数息観はそれぞれにそれぞれの内容 人の本源的に併せ持つ不浄 仏教の実践道の性格 思想

不浄 法などが修せられていた」という解釈が行われる程に、 用の集中統一をはかる方法であるが、初期仏教ではここだけが重んじられ 観念することによって、むさぼりの心の無意味を知り、これによって心作 最後の究竟不浄は、人の死後における屍体の無残な腐敗の状況をつぶさに U ぱら屍体の不浄相が取り上げられていたようだ。 ていたらしい。「不浄観と称して、屍体の腐敗してゆく過程を観念する方 「大乗義章」等になると生きた身体の内外の不浄が取り上げられてくると われるが、(6) ところでまた、この不浄観にも、種子不浄、 (または外相不浄)、究竟不浄の五つがあげられてくるが、この中の 摩訶止観にははっきりとこの五つが説かれてくる。 住所不净、 しかし「大智度論」や 初期仏教ではもっ 自相不净、 自性

あ 的所置をとる術もなかった古代人が、このような深刻な場面を想い出した れた死骸の無残な様子から説き出される。今日のような科学的態度や技術 0 腐敗から生ずる悪臭や風葬の屍体が鳥獣についばまれる状況の無残さで 恐らく真剣に現存在を問い直さなければならなかったろう。 初期仏教における小乗的禅観では、 インドの熱帯地に置去ら

 (Ξ)

落ち、 なわち、 散乱し、手骨・足骨・脛骨・腰骨・背骨・頭骸骨等がそれぞれ異った場所 文中の一部を現代語に代えた。) にある状態、⑦骨が白くなり、貝殻の色に似てくる状態、 血がつき、それらが筋でつながっている状態、 いは三日を経過し、 ṭāna-sutta)に説かれた九墓節(nava sīvathika-pabbani)であろう。す 墓節はつぶさに示している。 て年を経た状態、 肉ともになく、 犬・野牛・虫類によって食い荒された状態、 |体にまつわる不浄観を述べた「最も有名なものは<念処経>(Satipat-® 血がつき、 屍体が墓地に遺棄されて、①あるいは一日、あるいは二日、ある 筋でなおつながれている状態、 ⑨骨が腐敗して粉末になった状態」の九つの状況を、九 ただ筋でつながれている状態、 膨脹し、青黒くなり、膿爛した状態、②鳥・兀鷹・鷲 (○の内の番号は引用者がつけた。 ④連鎖した骸骨に既に肉が ③連鎖した骸骨になお肉や ⑥骸骨がはずれ、 ⑤連鎖した骸骨に既に血 8骨が堆積され また引用 諸方に

の貪欲心を治療することが 巛心を治療することが「倶舎論」に説かれているという。 このような屍体の九つの相を観ずることによって、次のような各

青瘀等の相を縁じて顕色(varṇa-rupa)の貪を治し、屍体の鳥獣に食

如きの四貪を対治す。 を縁じて妙触 せられる等の相を縁じて形色(saṃsthana rupa)の貪を治 (kirti)の貪を治し、もし骨鎖を縁じて不浄観を修すれば、通じてかくの (sparśa) の貪を治し、 骨鎖の中には四貪の境なきをもっての故なり。」(前 屍体の動かざる等の相を縁じて供奉 虫蛆等の 相

半、

部簡略の上引用

ゴーシャに至ると、これはさらにおぎなわれて、 この十不浄(dasa ashhā)とその意味するところは次の如くだという。 以上のような屍体に関する九つの不浄想がまず行われてきたが、ブッダ 十の不浄想が出てくる。 1

散相で、 るから、 を誇る者のいましめとなり、 の状態を示すから、肢体の優雅さを恃む者のいましめとなり、 肉体美を誇っている者のいましめとなり、 示するから、一時の強健に安心している者のいましめとなり、⑤は食残相 する状態を明示するから、色や香り等の虚飾をむさぼる者のいましめとな 皮膚の色つやを誇る者のいましめとなり、 ましめとなり、 は膨張相で、屍体の形が破壊したのを明示するから、形をむさぼる者のい ④は断壊相で、 かつては豊満だった肉体が鳥獣に食い荒されているのを明示するから、 外見の立派さなどを気にする者のいましめとなり、 統一した身体が破壊し変化するさまを明示するから、 ②は青瘀相で、皮膚の色が破壊されたのを明示するから、 何人もいずれは身体がこのように朽ち果てることを明 ⑧は血塗相で、 ⑥は散乱相で、 ③は膿爛相で、 血塗れの無残な状懸を明示す 身体を自己の所有だと考 四肢五体の散乱 屍体が悪臭を発 ⑨は虫聚相で、 身体の満足 ⑦は斬斫

厭逆すべきものであるから、 無数の蛆虫の巣になっているのを明示するから、 えているような思い上がりのいましめとなり、 歯骨の強さにうぬぼれている者のいましめと ⑩は骸骨相で、 身体の骨が

概要である。これを要するに、十不浄想とは、われわれの肉体の矛盾的自なる、というようなことが説かれてくる。以上が屍体に関する十不浄観の

(四)

己同

一を徹底的に指摘したものである

展体の出す不浄を指摘する九墓節やブッダゴーシャ等の十不浄の描写は、 の大著の第四編の中に充満している。しかし、人の出す不浄は屍体からば の大著の第四編の中に充満している。しかし、人の出す不浄は屍体からば な四つの不浄を取り入れて、屍体の出す不浄と併せて「五不浄」を説いて な四つの不浄を取り入れて、屍体の出す不浄と併せて「五不浄」を説いて な四つの不浄を取り入れて、屍体の出す不浄と併せて「五不浄」を説いて な四つの不浄を取り入れて、屍体の出す不浄と併せて「五不浄」を説いて くる。次に摩訶止観に現われた五不浄観を概見してみる。

五つは、 である。現代科学の目から見れば、性交・懐胎は清淨でも不浄でもなく、 浄の五つである。 生活の営み、死等の過程に現出される不浄現象を取り上げて くる。 は残り、 かし人間においては、 生命の維持発展を保つために不可欠であり、一つの合理性と必 然 性 を 持 という大目的を持つとともに、それとは全く無関係であるような別な欲望 この五不浄観は、 性交の結果女子側に懐胎が起ることがあるのは極めて当然である。 生命の種子が胎内に定着する過程をとらえ、それの不浄の面を見るの 前述の如く、 性交行動は反復される。 その第一の種子不浄とは、性交行為によって懐胎がおこ また懐胎後に性交欲が停止されることもなく、 人間 種子不浄、住処不浄、 動物のように、一回の性交によって直ちに懐胎が起 の一生の各段階、すなわち、 人間の性交は、 自相不浄、 面において子孫を得る 懐胎 自性不浄、 出 産・成長・ 究竟不 性交欲 この し

> 生動機、 き難い矛盾的自己同一であった。以上を一言にまとめれば、性交行為の発 現出する。 されなかった卵が廃血とともに排泄される現象等は、そのままでは不浄を をともなってくる。射出される精液、 は、 展する。しかも性交は、今日の文化の段階では何んとしても「白昼化」し得 子の女子大学院生と不倫関係を結び、 に支えられているという矛盾的自己同一を持つ。 方は、 程をとおして生命の種子がおろされることを、 る。そこはまた汚れやすい不浄部である。これもまた古代人にとっては解 おいてであり、 もどそらと考える者はないであろう。さらにまた性交行為に伴う副現象に 子不浄としてとらえていた。 も西田哲学でいう矛盾的自己同一内の負の極に位置している。こういう過 る行為とはなり得ないであろう。また、いまさらこれを動物的次元に引き 底となっている。 人倫にもとずき正しく行われる性交は否定されない。) この最初の とらえ 扱いを誤まれば、人倫の不成立や崩壊や混乱が生じ、大学助教授が教え 他の生活活動に伴う副現象と同様に、 第二の住処不浄、 行動そのものとその付随現象、 しかも性交を行う部位は頭脳でも心臓でもなく、人間の恥部に 屎尿排泄門と同門であったり、またはそれに隣接してい 第三の自相不浄、 (勿論、 遂にはこれを殺すようなことにも発 このようにとらえたからといって、 女子の性器からの愛液の排出、 性交の行われる部位等は、いずれ 排出・排泄という一種の不浄化 第四の自性不浄のとらえ方の 大乗仏教においてもなお種 従って、この矛盾面 0 取

種子はこのような中で十か月をすごし、月満ちて産道に向うが、摩訶止観ここは左右の腎臓に挾まれ、腹中の穢濁にかこまれたところであるとされ、第二の住処不浄であるが、ここでいう住処とは種子の宿る胎内をいう。

は、 すべからず。この身を養うがための故に種々の罪を造る」と結んでいる。 計してもって浄となし、 に美しく華やかに見えたことがあったとしても、裏面には何一つとして浄 間の中で何んとかして土に還元し得るものとしても、また、生存中はいか 肉は鳥獣についばまれ、 異化作用等による身体の汚れを排出しているという一般の法則から出られ の矛盾的自己同一を突く。 にも非ず、ただ尿道より出ず」を引用し、胎内生活と生誕にまつわる現実 相を持つものはなく、究極は死に至る。摩訶止観はこの五不浄観全体を、 に、この身が一度死に至って、 ないことを示す。 を摂取し、これを同化して身体を構成し、維持し、活動する過程で、常に 然に起こる不浄現象を指す。すなわち人間は、 この毒身を保たん。(中略)この身を愛重して死にいたるまで厭わず、搪触 ・排泄をつづけるという不浄現象そのものが生命現象の半面であることを 「みなこれ実観なり、 ここで大智度論の一節「この身は化生にあらず、また蓮華より生ずる 第五の究竟不浄は、 Π, 尿道、 第四の自性不浄は、 肛門、 得解の観にあらず、なんぞたちまちになかにおいて 腐り、悪臭を発し、火で焼けば灰となり、長い時 好衣美食もて愛護将養し、 **睦等から、常に唾・洟・大小便・廃血等の排出** 第三の自相不浄とは、生命体の機能によって自 前節の九墓節と十不浄観で既に述べてきたよう 若し山野に捨てられるようなことがあれば、 人間の九つの孔、 一般生物と同様、 頭を摩で頸を拭らて、 すなわち両耳、両 栄養物質

(五)

われたような人間存在そのものにつきまとう不浄観は、智者大師が言う如初期仏教の九墓節や十不浄想、大乗の諸論にも出てくる五不浄観等に現

道徳的、社会的、精神的な成長の機会を与える」ものであり、い、、、、人間の肉体的な生存を支えるとともに、人間にば、「環境は、人間の肉体的な生存を支えるとともに、人間に 然のままの環境と人間によって作られる環境」の両面に支えられているの の使命から外れ、ただ享楽を追うためのポルノ・邪淫・姦淫・堕胎と、そ 東洋古代人から見た事実であって、西欧近代の科学・技術は既にそれをあ 実の事実なのである。しかしこの事実は、科学や技術の進歩を見なかった く「みなこれ実観なり、得解の観に非ず」であって、 を追う者の自由の中に放任されていいわけは何処にもない。 が人間の生活である。したがって、人間が作り出す文化環境が感能的享楽 た一つの環境破壊である。「人間環境宣言」の前文第一項の考え方によれ には見えない人倫の頽廃という精神的不浄の深さを増している。これ れにともなら不良環境、 とを示し、これについての衛生を教えはしたが、半面において、 を忘れてはならない。科学は性交や胎内にまつわる不浄観のいわれないこ 応する「負の極」もまた古代になかったような深刻さを現わしていること る程度解決しているかに見える。けれども現代科学・技術の勝利によって、 の謙虚な反省の上になり立つ。この原点を古代人らしく突いたところに 道徳的・精神的成長は、まず人間が人間的存在を支える矛盾的自己同一へ 人間的存在を支える「正の極」の高度の成長があったとはいえ、これに相 病変(特に古代人にはなかったような性病)、 論議の余地のない現 人間に対し、知的 また、 かつ、「自 人間本来 人間 目

余で白骨に化した上で壺に納められ、ほとんど永久に保全してもよい程にの不浄は除去されたかの如くである。屍体は電気炉に入れられて、一時間次に屍体の出す不浄現象であるが、現代では技術的に処理されて、一切

この種子不浄及び住処不浄の意義がある。

ろう。 が、またグワム、 が現証となった例はいくらでもある。世界大戦の激戦において欧州各国兵 はとまり、 震に襲われたら(七・九が強度の上限とは限らないが)、 水道や 都市ガス 正しく使われた科学・技術の成果と思われるものであっても、その破綻し 法もつかず放置されたことのあったのはつい先日のことであった。また、 住民の屍体等々が、風雨にさらされ、 た原爆下の広島、 いるような現象が、 楽天主義者になった現代人から忘れ去られた公理である。 ナス面の現象も強化される。 火を見る如く明らかである。 場等々に放置されて、九墓節に描かれたような悽惨な光景を呈することは、 ない屍体は、 として見捨てる以外に方法はない。こういう場合、収容したくも収容でき 止まり、 ルの自家発電装置も利かなくなった時を考えてみよう。生き残ったとして た場合の地獄絵については、予めわれわれの頭の中に描いておく必要があ 公理が忘れられたことによって公衆が被る災害とも言えよう。文明化した 吞むに水なく、 「術の進歩は、それが進歩すればする程、 若しニューヨークや東京が大正十二年のマグニチュード七・九の地 医療の手段もつくせずとなったら、 燃えた無数の車や倒壊した瓦礫によって道はふさがれ、高層ビ 高層ビルの各階に、地下街に、地下鉄に、路上に、公園の広 長崎市民や反復する爆撃下で大量に殺戮されたベトナム ガダルカナル、硫黄島で玉砕した日本兵が、さらにはま 食うに物なく、連絡しようにも電話もエレベーターも 何時突発するかも知れない可能性を抱いている。これ これは、 関東大震災はその小型の見本であった。 膿爛し、悪臭を放ち、火葬にする方 科学・技術の信仰にたよって愚かな その矛盾的自己同一内のマイ 人びとは文明の大都市を廃墟 公害とは、 この 科学

を考えておかねばならない。過密都市は、文明化と反比例した究竟状況を呈するものであるという公理

処理される。

しかしながら、現代文明社会ではこの究竟不浄に述べられて

るが、 った。 濯し、 現象していると言ってよかろう。 廃水・廃物・屎尿の処理法をおろそかにしていた。 反省・無責任さは、現代のゴミ処理を戦争という表現で呼ぶ程にしてしま はただ規模の大小だけで、実質は同じである。 次に、 住居は拭き掃除し、ゴミはかたずけねばならない。古代と現代の差 代謝された廃物汚物は洗い落し、 壮麗なビルを建てることばかり考えて、そこから出る莫大なゴミ 自相不浄と自性不浄の二門は、 生命体は新陳代謝によって支えられ ひげ・かみ・爪は切り、 今日においてもほとんどそのます 現代の人びとののんきと無 肌着は洗

今日では十三億ガロンにものぼっている」という。 て、 だった」。またリヴァプールでは、「共同便所からの汚物は、しばしば隣接途半端で、その先端て道路の真中に突き出し、下水はたれ流しという始末 だ。 洋投棄が起こったらどうなることか。化学工業、 ○年で七○億、 処理のままパイプを伝って川に流れ込むが、その量は当時で六億ガロン、 た。 追いやられた。レイスの街のある部屋では、 する部屋に滲み込んできて、若干でも嗅覚の残っている者は居住不可能に に三十三しかなかった。衛生上の配慮から下水道が作られた場合でも、 自性不浄の現代版は屎尿問題である。欧米もかつてはこの問題に苦しん 「一八四三年のマンチェスターでは、 住民七千に対し、便所はわずか 家族用のベッドのすぐ真下に浸入してきた」というような状況もあっ またアメリカでも、 二○三○年で一四○億と推定されているが、 「マンハッタンの各戸から集められた下水は、未 この汚水は四フィートに達し 重油燃料、 地球人口は紀元二〇〇 その屎尿の海 工場排水、そ

貌されて不気味に生きている。 力を持っている海の浄化能力もつきてしまうであろうと憂えざるを得なく 他のゴミで汚れることと併せて考えると、地球の浄化能力の上に大きな 自性不浄は、 現代においては何百倍否何千倍かに拡大され変

- 西田幾多郎全集第九卷「人間的存在」一六~七百
- (2)般とは異った「限界状況」なる概念を立て、その諸相として死・苦・争・責を 特にヤスパースにおいては、客観的に説明でき、技術的に処理できる状況
- 早島鏡正「初期仏教と社会生活」第四編三三七~八頁
- 同書三六二頁
- 山口益、横超恵日、安藤俊雄、 舟橋一哉共著 「仏教学序説」二六〇頁。
- (9) (8) (7) (6) (5) (4) 早島鏡正「初期仏教と社会生活」三六一頁
 - 関口真大校註「摩訶止観」(岩波文庫)下巻一一九~一二〇頁

早島鏡正「初期仏教と社会生活」三五二~三頁

- 同書三五九~三六〇頁
- (10) リ三蔵の註解はこの人の努力におうと言われる。 人。紀元四三○年ごろセイロンに渡り、大寺(Mahavihāra) Buddhaghosa(漢訳名「仏音」)中インド、マガタ国のブッダガヤー付近の に住した。パー
- (11)早島鏡正「初期仏教と社会生活」三五四頁
- (12) 関口真大校註 「摩訶止観」(岩波文庫)下巻一一九頁
- (13) 同書一一九頁
- (15) (14) 同書一二〇頁
- 金子熊夫編「人間環境宣言」八頁(英文)、九頁 (和文)。
- ジェイムズ・リッジウェイ著、 先進工業社会の公害の実体」一八頁 長門・矢久保共訳「環境を破壊したのは誰か
- (17)
- (18) 同書三五頁

む す び、

わゆる「公害」発生因の原点とその克服について

牧畜すること等を表とし、第二に、その裏の備えとして「衣」をととのえ 「住」をつくること等であったろう。摂取された食物は、 「人の活動」の最も原初的のものは、まず第一に、採取し狩猟し栽培し 同化作用によっ

の矛盾を解消し、 境を利用し変形し破壊しつつ生き得ている存在なのである。 は、矛盾的自己同一として、環境に抱かれたり支配されたりしながら、 廃棄される運命にあり、究極は環境汚染を現出する。 る廃棄物は勿論、衣服や家という耐久消費財もまた、いつかは老朽して、 つくる営みは、全くの環境利用・変形・破壊であって、その過程で出され る。この、食物を得るための活動とこれを摂取し同化し、また、異化し老 される。いわゆる物質代謝ないしエネルギー代謝の中で生物は生き得てい 言われる。それはそれとして、矛盾的自己同一の負の面が生態系をゆがめ 廃物を排出する過程では、環境の利用・変形・破壊の何程か を 伴 い、 て身体各部を作りまた更新し、その過程や異化の過程で出る老廃物は排出 知恵が一にここに求められ、「最近は政府までがこの気になったらしい」と 自然生態系」である。 人間とのみ限らず、生物一切がそうであることにおいて変りはない。こ 老廃物や屎尿による汚染を起こす。 地上の生物一切の調和ある存在を可能にしているのが かくして生態学は時代の寵児となり、 第二の「衣」をととのえ「住」を 結極には人間的存在 しかも、ただ 公害除去の 環 幸

如、第三が都市化ないし極度の過密化である。の技術化・高度化(贅沢化)、その二が生活における哲学の未熟な い し欠て、遂に公害に移行するに至る要因には三つある。その一つは、生活内容

(二)

に不自然な人間生態系が大きく介入してきたのである。 が現われるまでになった。これを生態学的に表現すれば、 に至っては一千万都市が発展し、大小の都市群から成るメガロポリスまで 備えたモヘンジョ・ダロのような市街地も出現した。実に、ピテカントロ 石や煉瓦や瓦をもって作られた家がならび、 環境の中に人間的環境を作り出して行った。農耕地や牧場を内外に持ち、 家畜・水・風の力を利用する装置を作り、次第に集団生活を拡げて、 し作物を栽培する術を覚え、道具の考案を重ね、 上にホモ・サピエンスの登場以来であり、 った歴史として見ることができよう。この大きい問題の始まりは、この地 ノミクスに至って頂点に達する。 「知性」 に目覚めた人間は、動物を飼育 ・プスやシナントロープス以来の画期的な出来事が始まった。そして現代 文化・文明の進歩とは、 自然生態系の中に人為的生態系をはめ込んでい ホモ・ファーベルとホモ・エ 補装道路は勿論、下水溝をも 火の初歩的利用のほかに 自然生態系の中 自然 コ

欧近代文明は自然生態系を人間の支配下におこうとした。この傾向は日本傾向にあった。ところが、近代に至って西欧の状況に急変が起こった。西向で進んできたと思う。特に古代インドや近代までの日本は全くこういうら著しくはみ出すことはなく、むしろ自然生態系に順応しよ うと する方ら 高いい不自然な人間生態系は、近代に入るまでは自然生態系の枠か

の使用する強力な武器の科学・技術である。して、そのような変化を促進したのが近代のホモ・ファーベルであり、そにも急速に普及し、今やむしろ日本がその先頭に立ったかの観がある。そ

る。 えられる時代となった。人間は 現代は正に「物と機械の世界」に変質している。そして、試験管ベビーや のようである。 あわててアテナの殿堂に馳け込もうとし、 無気味な黒雲が一角に現われたために、 同時に倫理観の根本的崩壊におびえ、 遺伝子の合成が可能になったことから、更に進んで、生命の合成までが考 死んだ」の叫びが上がるとともに、実は同時に人間も死んだのであった。 ての西洋は「神と人間の世界」であったが、科学・技術の発達の下で「神は たなもの」として、文化ならびに文明の性格を一変させてしまった。 近代西欧に起った科学・技術は、 しかし、最近その限界が見え出したようだ。すなわち「公害」という 「知性」の進歩(?)に驚嘆しつつあると ヤスパースの言うように「本質的に新 楽観と不安の極度の不調和の中にあ 科学・技術万能の信仰者たちは、 しばらく空模様を伺うとするか

(三)

山をならし海を埋め魔天楼を築き、また強力武器で出てきて、一瞬にコンっては六○○倍の速度となる。「手」に代わる巨大な作業機が出現して、一からげにした上に五○倍の速度で運び、マッハ二・二のコンコルドに至一からげにした上に五○倍の速度で運び、マッハ二・二のコンコルドに至方と」の速度を時速四キロとすると、新幹線列車は千人以上の人びとを技術を媒介として極大にまで拡げようとしてきた歴史と言えよう。徒歩者技術を媒介として極大にまで拡げようとしてきた歴史と言えよう。徒歩者技術を媒介として極大にまで拡げようとして

クリート城壁を破壊し数十万人を瞬間に殺戮する。「目」は電子顕微鏡によって極微の世界を見、天体望遠鏡で極遠の星を発見する。教室ではせいぜって極微の世界を見、天体望遠鏡で極遠の星を発見する。教室ではせいぜのそれと併行して伸びたことは説明するまでもない。遂に「地球部落」のそれと併行して伸びたことは説明するまでもない。遂に「地球部落」のそれと併行して伸びたことは説明するまでもない。遂に「地球部落」のそれと併行して伸びたことは説明するまでもない。遂に「地球部落」がれば枚挙にいとまはない。

現代の「人の活動」は、産業革命前の人のそれに比べて何十倍か何百倍 切代がな国アメリカは、国民一人当たり平均十一トンの鉄を自動車や家庭ゆたかな国アメリカは、国民一人当たり平均十一トンの鉄を自動車や家庭で消費し、約一トンの廃棄物を生み出している」という。また三○年前にで消費し、約一トンの廃棄物を生み出している」という。また三○年前にで消費し、れを人力に換算すると約一五三人の奴隷を使っていることになると計算していたが、これを今日のアメリカに当てはめると「恐らく一なると計算していたが、これを今日のアメリカに当てはめると「恐らく一なると計算していたが、これを今日のアメリカに出てはめると「恐らく一枚当たり四○○人の奴隷を使用している計算になる」とルネ・デュボス教人当たり四○○人の奴隷を使用している計算になる」とルネ・デュボス教人当たり四○○人の奴隷を使用している計算になる」とルネ・デュボス教人当たり四○○人の奴隷を使用している計算になる」とルネ・デュボス教人当たり四○○人の奴隷を使用している計算になる」とルネ・デュボス教人当たり四○○人の奴隷を使用している計算になる」とルネ・デュボス教

ある。 財の補給、 接に莫大な汚染を出す産業にたよって生きている。 間的存在が必然的に出す汚染もこれと比例して数百倍に拡大されたはずで の何百倍かの贅沢なものになっていると言ってよかろう。 以上のような事実から推断すれば、現代文明人の消費生活は古代文化人 現代人は、 耐久消費財の消耗の更新、 日常生活の中から直接に出すゴミや車の排気の他に、 消費財を製造するための生産財の製 す ts わち、 したがって、 H 々の消費 間

> は何んとしても、 構は栄養失調状態となって、 野を開拓する、 たいものだ。 を繰り返したくない。 この難局を果たして生態学の知恵だけで打開できるであろうか。 のままにしておいたら、 技術的いとなみを停止し、 体を深く侵しつつあると言わねばならない。そうだからと言って、 造と代謝、 るのである。これ等を考え併せると、現代公害は癌症状的に現代文明の全 これらの各種の製造過程で必要とする諸資材の獲得のために山 等々の全体の過程の上で実に大量の「三 一億年前に地上の覇者であった恐竜が亡びたような歴史 「成功ほど失敗はない」という矛盾した嘆きを さ 文明は癌症状の下でたおれざるを得ないだろう。 あるいは急激に制限すれば、巨大な現代文明機 死を招かざるを得ないが、そうかと言ってこ 廃(7 を排出して われわれ

(四)

ある。 50 が故に根源的罪として意識する。 得ていること)によって生き得ているという恵み 大自然の抱擁力(現代の生態学的に表現すれば、自然生態系の中に位置を ころから起こる。こういう欲望を謙虚に「煩悩」として反省し、 我執と盲目的な欲望に迷わされていて、 系のバランスを奪ったために表に出てきた現象である。このようなバラン スの失調は、仏教の五不浄観が既に早くから指摘しているように、 公害現象は、西田哲学でいら「矛盾的自己同 しかし、 このような感謝の心で人生の基本態度をしっかり定めることが人類 宗教的にはこう考える一 ところが、そのような罪にもかかわらず、 生物の持つ本源的矛盾を見落すと に感謝する心が出てくるはずで 一」のマイナスの面 煩悩なる 人間 が生態

なのが常である。さらにまた、屎尿排泄に当たっても、 食するに当たっては、一粒の米も一滴の煮汁も残すことは仏罰があたると 等の廃棄物を出さない。また食膳につくに当たっては、 心をつくらせ給えと祈る礼法であった。今でも禅家の調理は、 不合理な消費と無意味な贅沢に過ぎたものはない。仏教者は常々これを 共存の第一条件である。 たねばならないと思う。これが公害除去の根源となる精神だと思うが、時 て解決しようとしているが、その根底においてはこのような祈りの心を持 に与えた戒めであった。 然に我が身から出た汚物をおあずけ申し、天地の力の功徳によってこれを 考えた。禅僧が食事をした後の食膳は、既に食器を洗ったかのように美事 に供え、貧しい者に幸を分つという心を表わすことも忘れなかった。 たものには箸をつけず、また米飯小量を小皿に取って、これを食膳の一角 め、一粒の栗も万人の労をおさむ」と感謝し、これをもって清浄のわが身 一例が「食法」である。それは食事に当たって「一滴の水も天地の力をこ 「有り難い」は仏教語である。また、人類の共存にとって最も大きな罪悪は 「もったいない」と考え、この精神を日常生活の中で実践してきた。その 再びわれらの力となさしめ給えと祈れとは、 仏教者はこの心を「ありがたい」と表現してきた。 現代の科学は一面においてこの浄化を人知によっ 私の亡父が少年の私 自己の適量を越え 合掌の上、 材料から何 天地自 また

は 原点が現代文明の悪質な癌的症状であるかの如く表に出て来た直接の原因 人間的存在の直ぐ足下にある問題であるという見解を述べてきたが、この 公害発生源の原点は、 一に科学・技術への盲目的信仰と、二に新時代の哲学の未熟ないし欠 人間的存在の矛盾的 自己同 一のマイナス面にあり、 代の若者はどう受け止めるであろうか

ろう。 受けついだものがあり、 化」ないし「天然資源の利用改善の問題」があり、こういう名の下に体制 特産物であるとか、社会主義国でも中国の「三廃」やソ連の「自然保護強 ともに「脱技術の哲学」が考えられることが、次に必要となってくるであ 公害解決には哲学がなければならない。そして、この「反公害の哲学」と 完全な資本主義体制にもなり切っていなかったソ連において、その出して 原点を突いていない。 とはできない」とか、いろいろの説が述べられるが、いずれも公害発生の の社会主義国における工業建設は歴史的に多かれ少かれ資本主義的条件を とは無関係に公害問題が深刻化しているとか、 あるいはまた、「こんにち つかめないはずのものだ。社会科学者の口からは、 しかしこの「三」の問題は「一」と「二」の解決がなければ解決の糸口が 如と、三には社会科学で取り上げられているような諸問題のためである。 いる公害が資本主義制度の残存の影響とするのはおかしい。いずれにしろ (昭和四八年九月三〇日脱稿 特に、革命後五〇年以上もたち、 したがっていっきよに公害発生の条件をなくすこ 公害は資本主義体制 しかも革命前には

- 吉良竜夫「生態学から見た自然」(一九七一年)一〇頁 「公害研究」二巻、二号所載、奥野良之助「生態学から見た社会」一○頁
- (3) (2) (1) ヤスパース著、 重田訳 「歴史の起源と目標」(一九六四年) 一五三~二三〇
- (5) (4) 環境科学研究所共訳 バーバラ・ウォード、ルネ・デュボス編、 河合武編「人類の行方「(一九七二年)八頁、渡辺格 「かけがえのない地球」三二頁 人間環境ワーキング・グループ、
- 同書三三~四頁。
- (7) (6)中共の概念で、 わが国の公害に該当。 重化学工業の工場から排出される廃気

と述べている。川口訳「環境の危機」二五六頁。 (8) コロラド大学行動学研究所のケネス・E・ボールディング教授は、GNPを廃液、廃物の三つの「廃」をいう。また、三害ともいう。(宮本憲一氏による)

の項による。 の項による。とあるという。竜谷大学「仏教大辞彙」三巻二〇七六頁の「食法」食をなす。」とあるという。竜谷大学「仏教大辞彙」三巻二〇七六頁の「食法」食をなす。」とあるという。竜谷大学「仏教大辞彙」三巻二〇七六頁の「食法して 「小許の飯を一盃」の項による。

献的考察>中に紹介された戸田慎太郎氏の所説。(同誌七一頁) (1) 「公害研究」二巻、一号所載、利根川治夫 <「社会主義と公害」に関する文(1) 「公害研究」二巻、四号所載、長砂実「社会主義ソ連の公害問題」四二頁。

主な参考文献一覧 走もの、または、再版されたものを主とした(但し仏教関係を除く)。

(同・七月)。(同・七月)、一巻(同・五月)、一巻(同・五月)、三巻(三・七月)、三巻(三・七月)、三巻(三・七月)、三巻(三・五月)、三巻(三・五月)、三巻(三・七月)、三巻(三・七月)、三巻(三・七月)

環境法令研究会編「公害概論」税務計理協会、一九七二。

設楽正雄「公害概論」オーム社、一九七三・九月第九版

宇井、戒能、坂東、宮本、荒畑「現代社会と公害」勁草書房、一九七二。

いい。 恩田、甲田、水上、石牟礼、渡辺、橋本「公害―被害者の論理」勁草書房、一九恩田、甲田、水上、石牟礼、渡辺、橋本「公害―被害者の論理」勁草書房、一九

星野芳郎「反公害の論理」勁草書房、一九七二。

野村好弘「公害と法の知識」帝国地方行政学会、一九七〇。金子熊夫編「人間環境宣言」日本総合出版機構、一九七二。

日本工業立地センター編「最新公害辞典」日本工業新聞社、一九七二。戒能通孝編「公害法の研究」日本評論社、一九七一・第五版。

「続・公害と法の知識」帝国地方行政学会、一九七一。

公害研究会編「公害用語辞典」日刊工業新聞社、一九七一。

Gräff Spegele: Wörterbuch des Umweltschutzes, Stuttgart 1972.

らびに発行、一九七一。 らびに発行、一九七一。

都留重人「公害の政治経済学」岩波書店、一九七二。

清浦雷作「公害への挑戦」講談社、一九七二増補再版、ここでは特に一九六六初───「現代資本主義と公害」岩波書店、一九七○・第五刷。

版を用う。

東大公捐講座「人引♪環竟; 一九七一。大河内一男外「公害」東大出版会、一九七○第六刷。

ヘルフリック著、川口訳「環境の危機」産業能率短期大学出版部、一九七一。

東大公開講座「人間と環境」、一九七一。

大平俊男外訳「大気汚染の科学」講談社、一九七一。リッジウェイ著、長門訳「環境を破壊したのは誰か」潮出版社、一九七二。曾田、坂本監修「かけがえのない地球」日本総合出版機構、一九七二。

半谷高久「公害の克服」三省堂、一九七〇。

国車乀骨景竟会後『世界各国○人引環竟:食囚巻、ユーユッ『扁。食丘巻、ヱ宮本、庄司「恐るべき公害」岩波新書五二一、一九七○第十刷。半名高夕「玄書⊄克朋」三省堂「一ナ七○

リカ編。 国連人間環境会議「世界各国の人間環境」第四巻、ヨーロッパ編。第五巻、アメ

科学技術庁資源調査会編「高密度地域における資源利用と環境保全の調和」一九

〃 「生態学の窓から」河出書房新社、一九七三初版。吉良竜夫「生態学から見た自然」河出書房新社、一九七三第七版。

杉浦俊作「日常の生態学」築地書館、一九七二。

河合武編「人類の行方」みすず書房、一九七三第二刷。

「中央公論」一九七〇年四・五・八・九・十月号。一九七一年三・六・八十月号。

一九七二年八・九月号。

「公害研究」岩波書店、一巻一~四号、二巻一~四号、三巻一号

東京都公害研究所年報第三号(一九七二)。東京私学教育研究所所報第三十一号(一九七〇)、第三十六号(一九七三)。月刊「高校教育」一九七二、十二月特集号「環境問題と教育」。

山口登、横超、安藤、舟橋「仏教学序議」平楽寺書房。関口真大校註「摩訶止観」上下、岩波文庫。朝日新聞縮刷版、昭和四五年七月・八月・九月。

アー 「仏教児侖」 当皮書店。宇井伯寿「仏教思想研究」岩波書店。

鳥鏡正「初期仏教と社会生活」∞ 「仏教汎論」岩波書店。

西田幾多郎全集(第九巻、第十三巻)、岩波書店。早島鏡正「初期仏教と社会生活」岩波書店。

中村元監修「新仏教辞典」誠信書房。

は省いたので、諒とせられたい。その他の参考ないし引用文献は、その都度、各節の後の註の中にあげて、ここに竜谷大学編「仏教大辞彙」全六巻、冨山房、一九三六。

— 24 —

開発途上国における教育の課題

一新しい観念の樹立について 一

鍾 清 漢

はじめに

「アジアは一つだ」一岡倉天心は彼の名著「東洋の理想」⁽¹⁾ の冒頭に斯く喝破した。いまからおよそ70年前に書いたこの名著は、昭和に入っても、特に戦争中にも天心の言葉はいろいろの意味で引用されていた。歪んだ使い方もあろう、故意の乱用もあろうが、とにかくこの言葉はアジアの精神的優越性とアジアの将来がアジア自身の中にあることを告げようとしている。しかし、宏大なアジアは、見たところ多数に分裂している諸民族の複雑な集合体であるのを、彼は彼なりにアジアは一つであることを説いていた。彼の言葉の解釈について筆者はここで云々したくないが、事実アジアは一つではない。しかし、アジアは一つから世界は一つでありたい理想を経済・文化・芸術の相互交流によって近づけることを望みたいものである。開発途上国の多くは植民地から新たに独立した国々である。そして、これら開発途上諸国は、世界中でも貧困地帯に属している。しかも、欧米や日本など先進諸国の飛躍的経済成長を除いては、世界における南北の問題は深刻である。これこそ「アジアは一つであり」そしてさらにそれが「世界は一つ」であるという「大同理想」⁽²⁾ を阻げているものであるといえよう。

開発途上諸国に共通している問題の一つは、経済発展の立遅れに加えて人口の相対的過剰と 増加率である。折角豊富な資源を所有しながら開発における技術の遅れが重なれば、それが科 学と工業化の問題にからんでくるのは当然である。

開発途上諸国における近代化を図るうえに言語の問題や、経済発展と教育をめぐる課題は数 多いが、とりあえずここで述べたいのは、その課題として、伝統教育制度、科学、技術とリー ダーツップや新しい観念の樹立などの問題を挙げることに止める。

- 注(1) 岡倉天心が英文で書いた「東洋の思想」The Ideals of the East with Special Reference to the Art of Japan London John Murray, 1903) の冒頭。
 - (2) 出所は礼運大同篇と公羊伝の二説がある。理想の政治とは,天下の太平であり,政権が人民全体に属し,安定なる生活と平等,博愛の大同世界をめざす政治理念である。

まず、新しい観念の課題の一つとして教育と経済について所見を述べてみよう。

- 教育と経済

教育とは何か、経済とは何か、そして、教育と経済とはどんなかかわり合いがあるかという

疑問に対するもっともてっとり早い答は、まず、教育学者や経済学者、その他多くの先哲の言葉を並べてみることであろう。しかし極く平易に言えば、教育は個人の潜在的能力を引き出し、人間性を伸ばし、より美しい社会、より豊かな人生を高めるためにある。ところで人間は社会的動物であり、個人が社会という大きな生活団体に属している以上、この社会生活を営むために、まず、『如何にしてこの社会をより豊富に、より楽しくすることができるか』ということに努めなければならない。そこでそのより豊かな美しい社会を達成するために経済という手段が考えられるが、教育はそれを継承し、伝達し、創造することによって経済と深い相関関係をなしていると言うことができる。

古今東西を問わず、あらゆる偉大なる文明の創造は、生活のゆとりがある時期に生まれたものである。古典ギリシアが奴隷制度を基盤にあの輝かしい文明に花を咲かせたのも、また、漢、 唐両朝の全盛期に、築き上げたあの華々しい文化も、実はその時代としての繁栄があったからではなかろうか。春秋時代の大政治家であった斉の宰相管仲は、「衣食足りて礼節を知る」とさえ述べていた。

歴史の潮流の中で、人口の要素や産業革命によってもたらされた社会制度と経済の環境や構造は大いに変容し、また変容しつつあるが、そのうちで近代のテクノロジーの革新ほど変容を迫るものはない。しかし、文明と呼称される変容された社会、もしくはその革新された技術は、教育という機能を通してなされていると同時に、教育もまた社会の変容を受けて改革されているという、サイクル的なメカニズムを呈している点は当然見逃せない事実である。

たしかに、よくいわれているように、20世紀の世界は、経済競争の時代から教育競争の時代に変わり、今や『教育危機の時代』とさえいわれている。このことは「過去の数世紀以上にも匹敵するといわれる、第二次世界大戦の急速な技術進歩は、経済生活の領域のみならず社会生活の全領域にわたって重大な変化を与えている。とかく、他の社会的機能に比べて時代の推移に超然たりえた教育の領域にもその変化はあらわれている。というよりも、教育ほどに技術革新の強い衝撃を受けたものはない。それは、今日、欧米先進諸国に於て『教育改革』が急速に進められていたことによってもわかる」。(1) 欧米先進諸国の経済発展は、技術革新(innovation)によるもので、技術の革新は教育によることは言うまでもない。

ところで今日、こうした世界のめまぐるしい急激な変化のうちで、さらに注目せざるをえない事態が生じてきている。それは、1957年、この世界に四個の星が現われたことで多くの人々を驚かせた事態である。すなわち、ソ連が打ち上げた2個の人工衛星と、他の2個は科学界の彗星――ノーベル物理学賞を受けた李政道と楊振寧の輝かしい成就がそれである。たしかにスプートニクの打ち上げは、宇宙開発に先制打を放ったソ連における科学研究の卓越を証明した。このことは、また教育界に大きな影響を与えた。これに刺激されて、米国のシカゴ大学のシュルツ教授を中心とした教育投資論――それは教育の理念を動かすとさえいわれるが――が発表されたのである。また、ジョン・デュウイのプラグマティズム教育思潮に疑念を生じさせ、今の国防教育法案(National Defense Educational Act 1958年)も出された。(2)それはヨーロッパにも影響を及ぼし、日本に於いては、1962年文部省の「教育白書――日本の成長と教

育」が出されて実に重大な課題を提供したのである。ひるがえって台湾の教育を考察すると、 楊振寧と李政道を初めとする科学者の海外での成就にある種の希望が持たれたとはいえ、この 成果は流出頭脳によるそれであって、多くの頭脳流出という事態は、台湾における先進諸国と の格差がますます大きくなりつつあることを示し、教育と科学研究の環境の整備について検討 を迫るものでもあった。

それはさておき、ここでまず問題にするべきことは、このように先進諸国の技術革新と経済発展が日増しに増加しつつある反面、開発途上国の伸び率はさほどでなく、その差はますます大きくなっているということである。その原因はどこにあるのか。経済環境を見ると、第一に、優れた豊かな自然資源に恵まれていないのだろうか。否、中国、エジプト、印度とも膨大な自然資源を持っているはずである。では第二として、人口の問題がある。だが、エリ・ギンズバーグは彼の『人間能力の開発』という著書のなかで「中国は物的資源に対して人口が相対的に過剰であるというハンディキャップを負っている。しかし、日本はどうかというと、人口と物的資源の関係が最高に悪い国であるにもかかわらず、はるかに高い経済成長率を遂げているではないか。[3] というが、そのものずばりの指摘には興味深いものがある。

開発途上国の経済発展を本質的に規定しているものは、教育に直接結びつく人間資源開発の問題である。単純に考えても、機械を設計し、それを据えつけ、操作し、維持補修する科学技術者は教育がつくるのである。それ故に科学が進歩すればするほど経済発展は可能である。ここにおいて教育の役割を再考せざるをえないという論議が成り立つ。

問題は三千年前から古い教育,文化があったにもかかわらず、中国においては経済発展と余りにもかけ離れた伝統的「科挙教育」が行なわれたことを指摘したい。李、楊に匹敵する科学者が米国に移住したのをいちいち列挙するに及ばないが、その原因を質してみると、誰しも米国の物的環境の良さがいろいろ挙げられよう。だが、私はむしろ人的環境の整備を強調したい。また、中国の「士大夫観念」に尾をひく今日の教育のあり方は果して人間資源の開発、科学者の発掘および育成に役立ってきたか疑わざるをえない。

次に開発途上国の科学と経済の発展を図るために教育を重視する場合、まず、遠い年代から 伝わる古い理念や社会因習にとらわれないことである。また、学問とは一部の人が官僚になる ためのものであり、それが昨今の学歴こそが立身出世のパスポートだとしか考えないような旧い観念や歴史的要因を打破し、新しい観念を樹立しなければならない。それは、プロモーショニズムに通ずるからである。そこで、伝統制度の因習における経済発展と教育をめぐる諸問題 をも取りあげて探求してみることにする。

まず、ここで、中国において「学問を以て土を取り、官をして必ず読書生たらしめる」の科 挙、そして孔子を精神的紐帯とする中国の礼法社会とは逆に、日本では儒教思想は何よりも封 建社会における大名武土階級の身分倫理としての性格を付与された。そしてそれが好都合に国 家の統一、天皇制の確立から、富国強兵に使われていた。一方、中国 では 消極的、保守的、 「怠惰」的になり、ついには五四運動に発展し、烈しい中国自身の礼法社会批判にならざるを えなかった。丸山真男は「……儒教に対抗するに足る思想体系は清に至るまでついに興らなか った。宗教的思想を除外すれば、シナ学界における思想的展開は儒教の内部でのみ行なわれたと言っても過言でない。……シナ帝国と同じく、シナ学界も真の思想的対立を経験しなかった。最近世において国際的圧力がシナ社会に漸く近代的—市民的なるものを滲透せしめたとき儒教は、はじめて三民主義という自己的に全く系統を異にする社会思想に直面したのである。」「4」という。だが、三民主義の思想も中国古代から伝わる四維八徳の儒教思想の流れを汲むもので、僅かながら孫文はそれに近代科学の必要を加味したにすぎない。「5」(文脈上、ここではこれについてふれないことにする。)

次にラッセルの言葉を吟味しよう。彼は、日本の教育の目的とは、その感情の訓練を通して国家の為に身を捧げ、且つその獲得した知識によって国家に役立つところの臣民を生み出すことに他ならないことを指摘している。また、この二つの目的を追求するに当って用いられた巧妙な方法については、彼は賞賛のすべさえ知らぬと言った。さらに、彼は「われわれは戦前の日本のうちに古代中国のそれとは正反対の欠陥を思い出す。旧中国の文人が余りに「懐疑的」、「怠惰的」であったのに引きかえ、明治前後から戦前までの日本の教育の生み出したものは、余りにも独断的で且つ精力的でありすぎるようである」(6)というが寸鉄指を指すことばである。ところで一方、中国では大小些細の何事も古きを重んじ不変を原則とし、古人の教えはあくまで正しいもので疑問や批評を許さなかった。たとえ、議論があっても、その議論に対する評価は古典に照らして合うか否かによって決る。また漢以後の学者は、文詞の学習のみに精神を突っこんで自然界諸現象の観察はおろか系統的科学知識に欠け、理数学の方面はほとんどみられない。

このように古い伝統教育は、経済事情、生産技術はおろか、学問にしても独立思考の実証的 研究を無視さえしていた。「樊遅、想学耕田、孔夫子斥為小人」 すなわち、樊遅という人が農業を学ぶといったことに対し、孔子はこれをきき「小人」といって叱ったという。形而下の学問と実業軽視の如き孔孟儒学の流れをくむ基本的心理状態における中国の伝統的教育理念は、経済事情に何らの関係をも持たない。のみならず、礼法封建的な孔孟主義を押しつけ、王室に都合のいいようにひたすら安定秩序を図り、支配者としての地位を鞏固ならしめた。これにひきかえ、民族の活力と個性や能力の発展を挫いてしまった。

また、すでに述べたようにラッセルは彼の教育論の中でも次のような興味ある叙述を行なっている。ここでとりあげたい問題の核心にふれているので引用しておこう。「中国の伝統的教育は、ある点では全盛時代のアテネのそれと大変似たものであった。アテネの青年達はホーマーを最初からしまいまで暗誦するように教えられた。中国の少年達も亦これと同じような徹底さをもって孔子の古典を学ばせられた。アテネ人は神々に対する一種の尊敬を教え込まれた。この尊敬は外的儀式を守ることから成り立ち、各人の自由な知識思索については何ら妨害を設けられていなかった。これと同じように中国人達も祖先崇拝に伴うある種の儀式を教え込まれた。しかし、それらの意味する信仰についてはこれを強制されなかった。せせこましくない優雅な懐疑主義こそ教養ある成人達の抱いていた態度であった。……」と言っているがその通りだと思う。そして生活態度についてもアテネ人も中国人も同じように生活を楽しみ、優れた美

の感覚によって洗練されたところのエンジョイメントの概念をもっているといわれている。しかしながらこの2つの文明の間には大きな相違があり、それとは「広く言えばギリシア人は精力的であり、中国人は事なかれ主義というか『怠惰』とでもいうか』いずれにせよ積極性を欠くことであったといわれるのもそれなりの理由があろう。一方、ギリシア人は彼らのエネルギーを芸術や科学に、また相互の絶滅のためにささげた。その何れにおいても彼等は先例なき成功をおさめたといえる。政治と愛国心とはこのギリシア人達の精力のために実践的なはけ口を提供するものであったといえる。たとえば、1人の政治家が追放された場合、彼らは追放者の一隊を率いてその故郷を攻撃した。ところで中国の官吏がその官職を奪われた場合、彼は故郷に退いて漫然とした田園生活を楽しみながら詩を書いた。その結果、ギリシア文明は自ら崩壊したが、中国の文明はただ外部からのみ崩壊させられ得るにすぎなかった。だがしかし、こうした相違はこれを全部教育のせいにするわけにはいかないとラッセルはいう。なぜなら、日本における孔孟主義は、ただ、一種のフォプール・サンジエルマン(Faubourg Saint germain)をつくりあげた京都の貴族たちのあの怠惰な教養ある懐疑主義を生みだすことはなかったからといわれている。

このようなラッセルの言葉が、中国の場合に全部そのまま受け取られるか否かは別として、少くとも古典を教育内容とし暗記を学習方法としたことは事実である。それは科挙制度とゆ着した文章の学がために科学的実証的な教育方法がなかったということにつながる点は、当を得た指摘であろう。また、「怠惰性」というか、事なかれ主義というよりか、バイタリティとフレッシュに欠けた一種の平和的、消極的国民性についてもそのようにいえそうである。清末に至って、工業先進列強諸国の侵略を受けることによってやっと目をさまし、科学に必要性を感じ、現代生活、民主精神、科学精神を叫ぶようになった。だがしかし、二千年来の習慣的思推方式、保守主義がのこり、つまり外衣は西洋文明を蔽い内質はまだ取り除かれない官僚封建性と事なかれ主義の消極性がはびこっている限り、教育の近代化はもちろんのこと、先述した欧米諸国の工業技術がとり入れたとしても、根のない経済発展であることは火を見るよりも明らかであるう。

開発途上国の教育の近代化は決して西欧列強の物まねをするだけではなく,その創造性を自己のものに似合った,つまり自分の国の風土に適したことに向けるべきであろう。科学技術の進歩が工業化社会に近づけることであるが,工業化が産んだ公害や人間疎外もやはり注意すべきである。

さて、先述したように戦前における日本の先進国に追いつき追いこそうという努力は、いろいろの問題もあろうが、ともあれ、戦後、日本は1955年頃から急速な経済成長を遂げてきた。日本の、このすばらしいテンポの発達の原動力は何か、日本がいち早く富国強兵策をとり、国内で半ば封建的な生産関係を利用して、資本の蓄積に役立ったことは疑う余地がないが、その基本的な力となっているのは「日本人が近代までに歴史発展させた民族の個々人の生産能力、組織力、模倣からの創造力、勤勉、その他の綜合を見るほかない。それは一言で表現すれば、孔孟思想の日本化、民族の『動的活力』とでもいうべきである。また、日本が封建鎖国から解

— 28 —

放されて、多くの養分を先進諸国から吸収したことによるであろう。」⁽⁷⁾ いずれにせよ、それは 戦前から蓄積された知識、技能という人的要素であったといえる。これこそ教育の普及と産業 技術の革新の努力がもたらしたことによることは論をまたない。

以上、取りあげたこれらの経験は、開発途上国の新しい観念を樹立するうえによき鑑となれよう。

- 注(1) A.H.ハルゼー他編,清水義弘監訳「経済発展と教育」東京大学出版会,1963年,まえがき1頁
 - (2) 産業計画会議編『才能開放への道一科学技術の創造的英才を育てよう―』平凡社,1963年,44頁 参昭
 - (3) Eli Ginzberg, "Human Resources, The Wealth of a nation," 大来佐武郎訳『人間能力の開発一現代の国富論』日本経済新聞社, 1961年, 2頁
 - (4) 丸山真男『日本政治思想史研究』東京大学出版会,1952年,6頁
 - (5) 孫文『三民主義』安藤彦太郎訳,岩波書店,1963年
 - (6) B. ラッセル, 堀秀彦訳「教育論」角川文庫43-44頁,
 - (7) 井上清, 鈴木正『日本近代史』471-472頁

二 科学教育・リーダーシップと経済発展

(-)

そもそも高度に工業化しつつある社会に共通する特徴とも言うべきものの一つは,変化のテ ンポの速さと規模の大きさである。なかでも最大の要因とも言える技術革新のひきおこす変化 は物理的環境の中から広く進むにつれて物理的次元の枠を越えて、人間関係、生活態度や社会 体制にも大きな影響を及ぼしていくということですから、技術革新と人間の問題を二つに分け て考えることはできなくなり、統一的視野に立って捉えられるべきである。開発途上諸国が工 業化技術に立遅れて、経済開発もしたがって遅れていることは事実だが、しかし、テクノロジ ーだけを現代文化の有力なる要素として捉えてよいともいえない。カウンツロ も指摘ているよ うに、テクノロジーの体系が複雑化するにつれ、人間は次第にテクノロジーを制御することに 困難を感じるようになった。21世紀をまぢかに控え、人類はテクノロジーの巨大化に対処して それを効果的に制御する方法を考え出せないままにいる。経済,産業などの分野の実績と比較 して、教育においては、テクノロジーのインパクトをうけとめ、組織的に統御する努力は始ま ったばかりである。アメリカの教育におけるイノベーションは、社会的(工業化も含めた)、 政治的圧力や現行の教育システムに対する不満の高まりからなされたものが多く,教育学や心 理学の実証的研究成果が殆んどといってよいほど見 られ ない。ધ゚ 合理主義を重んじ, 科学的 マネージメントの先端をきるアメリカですらこのような状態であることは確かに一つの問題で あろう。ともあれ、筆者はいままでの論旨で経済発展にとって教育は非常に重要であるから教 育の問題を特に強調したのにすぎない。しかし,筆者は教育が経済に従属するべきものでない し、独走するものでもないことをも重ねて強調しておきたい。教育はあくまで独立的存在でな ければならないと思うのである。(3) 教育の使命は人間性を豊かにする一面、 創造的思考性の使 命も帯びていると思うものである。筆者はここで教育の目的論を展開するつもりはないが,過 去中国の教育があまりにも文化の面にだけ行きすぎて,経済事情,科学的実証的な面をおろそ

かにしたか、或いは努力が足りなかったためか、今日の工業化、科学技術の立遅れ、ひいては 経済発展のテンポがおくれたことを指摘したいのである。そして工業化、科学技術の振興につ いて教育革新の問題も当然生じてくることも忘れてはならない。私たちは科学文明から生ずる 公害という地球破壊の魔物や人間疎外や、テクノロジーの奴隷にもなりたくはない。だがそう かといって、教育が人間性の問題、哲学的空想にのみ浮沈してよいものであろうか。今日開発 途上国と工業先進国との格差はどうやってつくられてきたかを回顧してみるだけでも、この問 いに対する私たちに与えた課題は非帯に明確だと思う。

(=)

ところで、工業化とは何か。工業化が経済近代化の重要な一環であることから昨今いろいろの視点から「工業化」が問われている。工業化とは広義の人間の生産活動即も生産、流通、交通、通信等において、機械化の一貫体系が整備され、実用化の段階に入った状態を指すというのが一般的な解答であろう。工業化は科学と技術の発展によって可能になったことはよく知られている。科学とは技術を支える基礎となるもので、機械工業に対する物理学、医学に対する生物学、教育学に対する心理学などを指す。これに対してテクノロジー(技術)は、これら科学の成果を機械の設計や生産工程の改善等、人間の生活に直接役立てていく実用の学である。しかしながら科学と技術の境界をはっきりつけることはむづかしくなってきている。これは、変革が長期間にわたる科学と技術の集積と相互浸透によってもたらされたものであろう。

それはさておき、ここで論じたいことは現在世界的にみて、急速な勢いで展開しつつある科学技術の進歩は、それぞれの国の経済構造や産業と技術の研究、開発に従って大きな変革を要求されている。そして、このようなすぐれた人材を生み出すには、科学技術教育についても大きな改革が必要とされているのである。アジア開発途上諸国にとって、日本をはじめ工業諸先進国における科学技術の振興とマンパワー政策の積極的且つ有効的な努力を見逃すことはできない。新しい発明発見の成果が経済に与える影響は、年々ますます大きくなってくるし、また科学技術の水準を高めるためにその国の社会や経済の果す役割も一層重要なものになってきた。とくに第二次大戦後急速に展開したオートメーション、エレクトロニクス、石油化学、原子力など一連の新しい技術がもたらした科学技術の成果が経済の発展と社会生活のためにつくした貢献は実に大きい。われわれは理科教育や科学技術の啓発普及運動が、初等教育から成人教育までのすべての段階を通じて、いっそう重要になってくることをあらためて強調するまでもない。科学技術と教育を考える際に他国の優点を学ぶことも大切であるが、しかし、自国の欠点をも卒直に認めたうえでそこから出発するのがより効果的ではないかと思われる。

 (Ξ)

「教育と経済発展――新しい観念の樹立について」という私の論点の一つには、経済事情からかけ離れた国の教育、しかも一部分の「怠惰的」な教養人のみ教育して来た過去の教育の欠点に対し、これから科学と教育は如何にあるべきかを探ることである。それは、すなわち各階

層におけるリーダーシップを強調する必要があると思う。とりわけ政府の卒先的かつ指導的役割をまず取り挙げたい。それというのは開発途上国家において新しい生産技術を取り入れ、そして新しい生産技術が取り入れられた際、それに伴ってくる新観念新組織の中心の力は政府であり、また静態の社会から動態の社会に変る原動力であるからである。しかし政府がこの効率を十分に発揮するには、必ず新しい技術を政府に取り入れられるように提供し、そして取り入れられた場合、全社会に普及され、吸収されている過程において民間の指導的階層を産み出すことである。このようであればこそ、経済発展と経済近代化の目的に達するのである。」40ところが新しい技術の発明は科学の研究によるもので、新しい技術が普遍的に吸収されることと、リーダー階層を養成することは教育に頼ることによってしかなされないのである。すなわち、技術革新と産業にこたえるために教育は大きな責務を負うことになる。

とりわけ戦後の技術革新のスピードは、現在では産業のみならず、学校教育にも非常に大きな影響を及ぼし、また及ぼしつつある。それは、技術革新は何よりも質的に優れた労働力を多数必要とする。従って、養成の面では科学技術、専門技術はもとより一般の技術者作業員に対してもこれまでよりも高い教育水準が要求される。なかんずくば、技術の不断の変革に適応できる基礎的学力の修得が大切なこととされる……。」 しらといえよう。

当然、新しい技術は国外から輸入し、外国に模倣することはできる。特に経済発展の初期はこのようであるが、しかし、新しい技術を借りてくることは、国家の経済発展が永久に他国の後に取り残されることでしかない。これはのちほど触れてみたい日本と中国の例からも裏付けられよう。それに新しい技術を輸入したとしても、相対な科学研究の基礎が必要である。自分自身にある程度の科学基礎がなければ、いかにして模倣することができるであろうか。たとえば、ある名画家の絵を盗作しようとしても、それについてはある程度の画家の素質が必要である。同じように科学技術を基底とする経済発展でなければ、それは根のない経済発展に等しいものであり、低開発経済の規範から脱皮できないであろう。

(四)

まず日本を例の一つとして取り挙げよう。明治維新以後の日本の近代化と経済発展はいくつかの特徴があった。その中で特に注意に値することは、政府の指導的役割による各種「先行人材の養成®(いわゆる先行人材とは政治的先行人材、経営的先行人材、科学技術及び文化的先行人材がある)と教育の普及であった。言うまでもなく日本の今日のような発展は、明治初期からすでに政府の指導的役割に負った教育と科学に基礎があるため、第二次大戦の敗戦からの立ち直りは早く、そして今日世界に誇る高度成長を成し遂げたのである。要するに、日本の経済発展は帝国主義から戦争にまで発展するそのこと自体を差し引いて単なる経済発展の立場から見た場合、明治維新からとってきた政策と政府の指導的役割がいかに大きかったかがうかがわれよう。これについて、艾倫氏も「十九世紀後半の数十年間において、あらゆる日本の重要なる西洋式工業はほとんどといってよいほど、政府のリードによってなされていないものはなかった。」と述べている通りである。

しかし、ここでわれわれが見逃してはならないのは、いままで実は明治初期においてその近代化の基礎づくりともいえるその発展に貢献した人々の人的能力、とくにその指導に当ってきた人達の指導能力と新しい考えというものは、当然明治以後の新教育によって作られた人々ではないこともわれわれは知らねばならない。明治初年の日本の指導者たちは、むしろ幕末の徳川時代の封建的な社会において教育されてきた人達である。数多い寺子屋から急に小学校に切りかえられた制度や江藤新平のような人達や、フルベッキの来日による日本の西洋文明摂取も実は明治維新前からあった。ここから、われわれは時代と時代の受け継ぎ、つまり近世から近代へのバトンタッチには一種のつながりがあることに注意の眼を向けたいものである。そして明治維新後の日本の教育が普及し大いに発展してきたことは、それが日本の近代化工業化に向って進むために役立つこと、つまり工業技術をこなし得る国民の素質というものは、教育が大きな役割を果したのである。

それは文部省が1962年に出した「日本の成長と教育」(教育の展開と経済の発達)と題する教 育白書でも分るように、社会と経済の発達に教育が果す役割がいかに重要であるかを実証的に 論じたものである。そして経済発展から長期総合教育計画の必要を国民に強く訴えていたこの 白書はいろいろの面において優れていた。教育の機会均等の問題を取り上げたことや、過去25 年間に増加した国民所得のうち,その25%が教育の効果によるものだという「教育寄与率」を 計算し始めたことや,教育政策,教育計画を科学的政策に進むべき必要性を明らかに指摘して いた。白書の経済発展と教育の役割について世界各国から注目された点の第一は「戦後の復興 とそれに続く経済成長である」。 すなわち、 敗戦の荒廃から立ち直った戦後の日本の経済復興 とそれに続く経済発展の巨大な足どりは欧州における西ドイツと並び、さらに追いこし、世界 的奇跡とまで考えられている。物的条件のほぼ4分の1を喪失したにもかかわらず、この輝し い戦後の経済発展を支えたものは戦前からの蓄積された知識,技能という人的要素であったと 言われる。これこそ過去数十年にわたる教育の成果の蓄積にほかならない。第二の点は教育制 度の果した 役割を挙げ、「しかもこの教育の内容が技術的変革と経済発展の方向へ意図的かつ 強力に志向された近代教育であったこと」。第三点として, 明治初期において アジア諸国のう ち,ひとり日本が後進性を脱却して近代化に踏み出したこと,「特に有業人口の大部分を占めた 農民に対する普通教育の普及であったとみられている。

また、われわれが日本の近代化を語る際、どうしても明治初期の教育が果した近代化への役割を無視することはできない。⁽⁸⁾ たとえば、明治維新政府は、成立の当初から全国に施行する統一的な教育制度の立案を企画していた。明治4年文部省新設に当って文部大輔の任に就いた江藤新平は基本方針の一つとして教育制度を制定するにあるとし、直ちにその立案を進めた。明治5年(1872)8月に発布された学制は109章からなり、その内容は「大中小学区ノ事」「学校ノ事」「教員ノ事」「生徒及び誠業ノ事」「海外留学生規則ノ事」「学費ノ事」等について規定している。追加編を加えると、全部で213章となっている。⁽⁹⁾ ところが「学制」は西洋の教育制度を採択し、内容が多方面にわたり、条文が詳しくかつ整然としていたとはいえ、当時の日本の国力、民族、文化の程度とかけ離れ、全国に実施する上、種々の支障があった。しかも政府はこ

れを強行し、過度の干渉をもした。そのため国民は児童就学のため一家の労働力が減少したり、経費(税金)が増大する結果になった。このため暴動を起こしたり、小学校を焼き打ちするなどの弊害を生じた地方もあった。¹⁰⁰ 明治12年9月には学制から教育令に替えて、漸次日本の国情に沿って行きながらも、日本の教育制度は健全化し、日本の教育が世界に誇る発展を成し遂げ、そして社会経済の発展に寄与したのであり、その指導的役割は認めねばならないと思う。しかし、日本は科学技術の研究の分野においては、その奨励はまだ不満であるとして、「従来の日本の科学技術には、極めて独創性に富んだ画期的な研究開発があまりにも欠けていた。」「以上であるとして、「従来の日本の科学技術には、極めて独創性に富んだ画期的な研究開発があまりにも欠けていた。」「以上であるとして、「従来の日本の科学技術には、極めて独創性に富んだ画期的な研究開発があまりにも欠けていた。」「以上である。すなわち、世界の国々と競争し、その経済と文化をほんとうに一流の水準にまで引き上げるためには、独創的な研究こそ最も重要な課題なのである。この目的を実現するためには、研究開発の体制を整備するとか、その成果を経済部門にうまく取り入れて有効に活用することが、すなわち科学技術の分野で創造的な人材をどのように養成し、その能力をいかにして独創的な研究、開発や生産活動に発揮させて行くかという点こそ最も根本的な課題の一つである。「2000年を経済である。」「2010年では、1010年である。」「2010年では、1010年である。」「2010年である。」「2010年では、1010年である。」「2010年では、1010年では、1010年では、1010年である。」「2010年では、1010年

これまで、開発途上国云々と言ってきたが、しかし、開発途上の国といってもさまざまであることは百も承知している。とくに、科学技術を高めるために、教育を重視する場合、発展途上の段階では、かなりの開きがあろう。本文でとりあげた範囲もはっきりと限定しなかった。ただ、ここでいえることは、たとえ、同じ発展途上国(厳格にいえば、、ホンコン、シンガポール、台湾などの中進経済国や後進経済国もあれば、文化の後進国もあるが)が先進国に追いつく過程において、本文でとりあげたことがその一端を示すものにすぎないことである。またそれは体制以前の問題でもあろう。

(五)

ところで社会主義国ソ連はどうだろうか。

ソ連の教育はすべての国民にひろく開放し、学校と産業とを密接に連繋させ、国家の要請に基く生産技能者、技術者を養成することを目標においている。1917年革命後の発展は著しかった。それは政府の指導によることは勿論のこと、科学技術研究の重視は特質すべきものである。その総合技術教育は、学校と国家社会建設の実際の活動を結びつけるものであるとし、こどもたちの全面的発達を保証し、職業選択の土台を与え、実際的労働のためのガッシリした訓練を与える。それは現代的な生産とその基礎になっている基礎学(力学、機械学、技術学)、そして産業や農業に使われている科学の主要な法則についての広い一般的な概念を与え、実際的に労働に欠くことのできない何らかの技術を習得させる。総合技術教育は、学習を社会的に有用な労働につながりつけるものである。[43]

ソ連の学校組織は7年制の義務教育から完全10年制総合技術教育へ移行しているといわれているが、そうなれば総合技術教育は一段と高められよう。事実上ソ連は高度の知恵を要する仕事、例えば文学、芸術等にもかなり奨励し、教育科学アカデミーには九つの研究機関を有して

いる。ソ連の科学技術者養成に関して、米国ではハーヴァード大学のロシア研究所やMITの国防問題研究所などを中心として研究しているが、ソ連を訪れて詳細に実地調査したアメリカNorwich 大学の名誉学長 H. L. Doage 博士は、「5年制のソヴェトの工科大学の卒業生は、アメリカに比べて、50%以上の学習をしていて、5年制のソヴェト大学理科系の卒業生は、アメリカ M. S. (Master of Sience) のに相当する」と報告している。またソヴェトの工科大学ではアメリカのカレッヂの専門課目の二倍の時間数の授業が行なわれている。そのようにむしるアメリカよりソ連の科学教育が進んでいることを率直に指摘している。革命後のソヴェトが後進工業国からスタートして急速な近代化を進めて行くための最初の段階では、科学技術教育の普及と産業や研究機関の需要を満たすだけの専門家の供給という量的な問題の方にむしろ施策の重点がおかれていたであろう。しかし、さらにアメリカに追いつき、それを追いこすという課題を実現するためには、科学技術の水準を引き上げ進んだ工業を建設することが最も急要なことの一つであった。この目的のためにたえず大きな努力が払われてきた結果、宇宙開発をはじめとする独特な教育方法の普及徹底と、幅の広い科学、技術者層の育成という地盤が優れた人材の発見とその活用とに大きな貢献をしてきたのである。

次に英才教育についてみると、現在のソヴェトの総合大学や理工系単科大学の卒業生が数の 上でアメリカを上回っているだけではなく、教育の内容の高さもアメリカでの標準的なそれに 比べて優れていることは、アメリカ側の専門家さえ認めていることである。⁶⁴

1958年9月、ソ連との科学技術競争における立ち遅れを取り戻そうとして制定されたアメリカ「合衆国国防教育法」は、才能開発のために高等教育ばかりでなく、中等教育に対しても巨額の投資を行なっていることは注目に値する。「国際間の経済競争(ないし軍事競争)が技術競争であり、さらにこの技術競争がすでに教育競争に転化していることがわかろう。大げさに言えば20世紀後半はすでに教育競争の時代に入っている」。「「以上のことからはソ連が科学研究設備に惜しみなく莫大な投資をし、科学の研究人員の待遇を優遇させ、その地位を上げていることはよく分る。これらのことは、ソ連が政府のリードと科学研究を重視してきたのが主な原因である。ソ連は政治制度や社会的構造などにいろいろ異った体制を持っているが、ともあれ政府の力で開発計画が立てられ実施せられ、またそれによって英才教育、特に才能ある人間が発掘されて教育を受け、登用されているようである。

とにかく、日本、ソ連の科学、技術そして経済発展が飛躍的に進歩したことは、さまざまな 要因もあろうが、就中、政府のリードによって教育に力が注ぎこまれたことに原因があるのは 否めない事実である。これらについては後述にもあるが、ハービソンが人的能力開発の理論で も明らかにされたように、指導者の養成ほど大切なものはないといえよう。

(五)

次に中国の事情をみよう。日本が明治維新で成功した西洋技術の取り入れの時期とほぼ同じ く、中国も清末からいわゆる「洋務連動」があったが、結局は失敗に終っていた。そもそも中 国と西洋諸国の交渉の方式は、伝教、通商、それに戦争の三つであったが、アヘン戦争から始

まった一連の列強の大砲と巨船の脅威の下に「戊戌政変」「立憲維新運動」、そして「新教育」 が生れたのである。「新政治」を主とする「洋務運動」の失敗した原因は、大まかにいえば第 一に、中国の「洋務運動」は清政府の一部の官僚や、軍閥の提倡によってなされてきたもので あり、決して国民全体の利益と国民自身から始まったものではなかった。第二に、「自強馭外」 のスローガンを掲げ、「師夷之長以制夷」とはいえ、帝国主義列強に対しては、終始妥協し、 信頼し、一部の商人などは私利に走ることもあり、帝国主義に闘争しなかったからである。ま た「中学為体、西学為用」のスローガンは西洋の近代生産方法を利用するだけで、資本主義の 発展を好まなかった。そのため、近代工礦、交通、企業は創設したが、国民には企業を自由に させることに制限をした。「洋務人才」も養成したが、科挙制をのこしていたため、新式教育 はどうしても発展しなかった。これを一部の人はこの「洋務運動」が失敗した主な原因は「西 洋化」の不徹底によるものとし,全般的な西洋化の教育思想が必要だとしたが,しかし,封建 の土壌には、当然資本主義の花樹は成長できなかった。要するに中国の「洋務運動」の破綻は 次の二方面に現われている。その一つは、近代工業の創設に独立発展を図らなかった。例えば、 工業、技術、管理人材方面を計画的に育成しなかったことである。ただ、長期的にわたって外 人に頼り、外国人によって存在する買弁、機械設備と原材料方面においても、独立発展を図る ための準備に暫しの間、外国から外国製品の買入れでなくて、外国製品にひたすら依頼するの みである。その二は、企業の大部分がほとんど外国人の手に支配され、このため、当然技術者も 本国の技術伝授に力を尽さなかった。日本の明治維新は、その資本主義発展の過程においては、 人材,技術,設備,等各方面にわたって,ある一時期は外国の技術を導入したが,それは長期 の依頼ではない。それは、明治27・8年の日清戦争後、日本の近代産業は飛躍的な発展を見せ たが、これに即応して「実業学校令」が制定されていることからもその積極性が分る。

これは明らかに、明治維新の成功はいろいろの指導的役割を果した人材もあったことは勿論、 技術を取り入れ、それを消化し、または模倣から創造へ、独立性、自主性を守り、愛国、勤勉、 活力の国民性にもよることであろう。これと相対的に清末における腐敗政治は、「洋務運動」 も官僚、軍閥または野心家の私利にある以上、当然、長い目での技術導入と科学技術習得、人 材の育成の意図がなかったから中国は不成功に終ったのである。

(六)

開発途上国の近代化と経済発展を考える場合、中国洋務運動の失敗を教訓に、日本および先進諸国の発展の過程や成功の経験を習い、科学教育を重視し、その普及により、国民の新しい技術を受け取る能力を高めさせることは重要である。科学教育の基礎がなければ大量の新しい技術を輸入することができないのであり、それに伴ってくる新観念と新組織も輸入してきた後、それを直ちに広めさせることができない。言いかえれば、リーダー、科学と教育は経済発展の基本的要素なのである。

ホンコンや台湾の場合,知育普及があるが,形式主義,進学主義の悪弊はいまだに存在している。これは因襲的社会における家族と門閥とのつながりや個人的な面識関係において生ずる

前近代的社会が持っているもう一つの病根である。

近代国家の建設にとって経済および国民の開発と人間活動は重要である。資本、天然資源、外国の援助、国際貿易は経済成長にとって重要な役割を演じるものであるが、いままで論じてきたように、科学、技術、教育とリーダーシップ、つまり人間の能力ほど大切なものはない。これは日本の経験によって最も端的に現われている。過去の日本における産業社会の発展が、教育発展をもたらし、また教育発展が産業開発に寄与してさたこの大綱について、これを軽視してよいとする人は恐らくいないであるら。^[4]

- 注(1) George S. Counts, Education and American Civilization (New York, Bureau of Publication, Teachers College, Columbia University, 1952), pp. 158-185.
 - (2) Paul Woodring, "Reform Movements from the Point of View of Psychological Theory," in Theories of Learning and Instruction: Sizty-Third Yearbook, National Society for the Study of Education (Chicago, University of Chicago Press, 1964), Part I, Chapter 12, pp. 286–305.
 - (3) 清水義弘「教育計画の思想」(清水義弘,天城勲編「教育計画」)34頁。
 - (4) 尹仲客「従台湾及亜洲落後地区的経験看経済発展問題」(中央日報, 63.3.13)。
 - (5) 清水義弘「二十年後の教育と経済」14~15頁。
 - (6) 麻生誠「大学と人材養成」(中央公論社)に詳しい。
 - (7) 文部省「日本の生長と教育」8頁。
 - (8) 尾形裕康「教育が日本の近代化に果した役割」国士館大学創立50周年紀念論文集。
 - (9) 仲新「明治の教育」至文堂,昭和42.5.25,91頁。
 - (10) 尾形裕康「日本教育通史」(早大出版部) 169頁。
 - (11) 産学企画会編「才能開放への道」13頁。
 - (12) 同前掲書。
 - (13) ディアナ・レヴイン著周郷博訳「ソ連の教育」岩波書店 8頁
 - (14) 同前掲書 50-51頁
 - (15) 清水義弘前掲書 16頁
 - (16) 仲新「明治の教育」(至誠堂) 290頁。
 - (以) 松原治郎「産業社会の発展と教育」(岩井竜也,松原治郎編著「産業と教育」1967年)21頁。

三 開発途上国における伝統教育と社会経済的意味

教育の発展は、一国の総合発展計画の一環として、絶えず、社会経済発展と全面的に対応しなければならない。その重要なる目的といえば、教育の近代化にほかならない。国家教育投資、ないし人間資本の創造も、社会経済の発展から、文化の統合、さらに政治の意識形態に至るまで密接な関係にある。しかし開発途上国にとって、教育の近代化は、まず避けて通ることのでさないものがある。それは伝統教育の因習と各種制度や法や道徳の間に現われる変化のテンポとの相違から起りうる Cultural lag という一種の遅滞現象であり、そのギャップによる不均衡、不調整の問題である。そこでまず伝統教育制度にみる因習と観念とその文化の遅滞現象について言及してみることにする。

(一) 伝統教育における文化遅滞現象について

前号で考察したように、⁽¹⁾ 教育投資にとって 関連のある連繋を示す体系的な研究 を モ デ ル 図式化したのはハンナである。⁽²⁾ しかしながら、 発展途上国の教育投資ないし人的資本の創造

を考える場合、どうしても避けられないのは、伝統教育には困迷する文化の遅滞(cultural lag)の問題がある。発展途上国の社会経済発展計画は多くの場合、その発展計画の内容がかなり充実しているが、こと、マンパワーの発展に関しては、政治、経済、社会諸制度のよりよき創造、つまり、「経済の離陸」に必要とされる技術マンパワーや指導的先行人材の養成計画が打ち出されていない。社会経済および政治の意識形態、さらに文化の統合にとってもカリキュラムの内容およびその優先順序こそ教育の近代化を図る上に欠かせないものである。教育は消費だけではなく、「教育は一種の投資である」ということを知らない旧い観念が一般のひとびとの脳裡にひめられている。教育は消費から投資へと、そしてさらに期待される社会の進化にとって必要不可欠の条件である。ところで、進化を促すものは、カリキュラムの発展に頼ることであり、それはカリキュラムこそが、訓練の目的を達成する核心である。教育の企画をする人と教育の指導者たちがこうした考えを理解できない場合、国の総合発展と教育発展をめざす教育政策は当然失敗するであろうと言えよう。

一般に、教育投資とは大抵の場合、教育費を増やすことによって教育発展を促すことをさすと解されがもですが、しかし、これは単なる人的資源開発において、国家投資モデルの中の「育成」の部分およびその処理順序(ルート)といったことに過ぎない。学校をより多く建てること、教員をより多く養成すること、義務教育年限を延ばすこと、さらに、ラジオ、テレビ視聴覚教育の施設による教育工学のシステム化を図ることなどはごく一般論に過ぎない。しかし、「投入」(課程)の研究および各種のカリキュラムが果たして国の教育目的およびその教育政策に合致しているかどうかについてのアドバイスはどうだろうか。教育目的が明確にされなければされないほど、その育成効果が国の発展の目標から遠ざかることであり、たとえ、マンパワーが多く養成したとしても、それが、そのまま工業化社会に必要視されるとは限らない。ある国が経済成長のある段階から次の段階に急速に発展を望む場合、一種の cultural lag となる伝統的教育から離れた教育法案を企画すべきであるう。その意味で前述したハンナの「投入」「育成」および「産出」のモデル図式は、開発途上の国々にとって参考にはなれよう。そこでそれについて研討を加えながらみてみよう。

1. 「投入」(in put) について

およそ、国家目標と教育目標の適応なしには、適切な教育を望むことはあたかも虚をつかむことに等しいものである。一般に、開発途上国によく見られる先進国のものをそっくり借用した教育制度、たとえば、カリキュラムの企画、教育機関の設置などをとっても、開発途上国の伝統的習慣と先進国の丸写しのカリキュラム原版とは、適合できるはずはない。それよりか、むしろ、葛藤すら免れない。このことは現在の文化の本質を理解した上で、外来文化を吸収するのが妥当であろう。伝統社会の adaptive culture たとえば、各種制度、法、道徳や評価などでよき伝統文化を保留することによって、はじめて、新しい外来文化を選択し、調整され、新しい観念、新しい習慣が産まれるのである。結局は、工業化される道程で起りうる文化的遅滞とのギャップをどう埋めるかという問題である。それは技術進歩が社会生活のなかで、遅滞現象を起こす諸々の事象が結果的には開発途上国に不均衡をもたらすことになる。広い意味の

教育,つまり正規でない学校外の教育のカリキュラムは、社会存続と社会改造に努めるために、 上述の問題点を大いに考慮しなければならない。さらに、ハンナの国家教育投資のモデル図式 で示した「投入」(課程)で常に検討と批判を加えながら、新しい教材を取り入れるとともに、 地域性と普遍性の原則をくずすことなく、適切なバランスのとれた発展が必要であらう。

2. 「育成」(education) について

まず、ルート(順序)の問題から考察しよう。

カリキュラムの実施に当っては、次に示すいくつかの方法がある。各種別学校教育で、教育 計画を遂行すること,また,正規でない学校においても,文化の持続および新しい文化の吸収 の役目を果たすことである。中等以上の教育、とくに高等教育は、もっと市民に開放されるべ きであろう。とくに、カリキュラムの企画は、エンヂニア、衛生、経済および公共行政の各部 門が協調しあって、理論と実習が協調できるようにすることが望ましい。たとえば、農業一つ をとってみても、教育の仕事に携われる指導者と協力し合うことや、学校施設を有効に利用す ること、または伝統教育の tool を活用して非伝統性の利用に役立たせることなどは、 究極的 には、限られたGNPに対して経済成長の進歩が図られるのである。開かれたコミュニテイス クールが、地域社会に対して、カリキュラムの編成で相互に協力しあってこそ、地域社会の活 動に貢献し、ひいては国家目標の達成に役立つのである。この点、たとえば、フイリッピンの コミュニテイスクールはその好例の一つである。また、ラジオ、テレビ、映画の巡回放映等は 大衆教育にとっても大きなメディアである。この点、日本の近代化と経済発展の役割のなかで も、この方面における教育番組の貢献は大きい。とくに文盲の多い発展途上国においては、耳 と目からの直観教授は、新しい技術だけではなく、新しい観念の樹立についても、また、生産 の面だけではなく、秩序ある社会の建設にとって、もっとも有効な手殺であるといわなければ ならない。

なお、上述のなかにも、軍事学校や徒弟制度を有効に使う補充「ルート」も考えてよい。これは、人間資源の蓄積、物的資源と経費の窮状下における国にとって教育投資の効益をもたらすことが賢明であり、そのため、上述の軍事学校や徒弟制度を生産や建設にも役立たせることも一つの方法であろう。

次は、優先順序の選択が問題になってくる。

資源の乏しい国に対し、投資の基金が正規のまたは正規外の学校や教育事業に平均的に配分すべきか、またはどちらかに優先順序をおくべきかという選択が必要である。これについてハンナは次のような原則を打ち出している。⁽³⁾ 第一の優先は、まずマスコミュニケーションと徒弟養成による多数の文盲に教育を与えてGNPを高めることである。第二の優先は、教員養成機関を設けること、成人教育を施すことによって多くの技術を習得させること、第三優先は、中等教育の急速発展によって小学卒業生をより多く収容させること、第四優先は、高等教育の強化である。第五優先は優秀なる教師を先進国に留学させることである。これらは限られた一定の教育費をもっとも切迫しているマンパワーの養成に重点をおき、浪費を少くすることにあるといえよう。

ところで、先に述べた「ルート」と「優先順序」の観念で明らかにしたように、青年に職業の 選択の他に、職業に合った自己の能力を養成してゆくことについて、カウンセリングとガイダ ンスが必要である。それは、青年自身の潜在的能力がいかなる職業に就くか、または進学に向 くかという進路指導はマンパワーの養成にとっても最も重要な教育活動であろう。これに関し て教育方法も伝統的なテキスト暗記法から脱皮しなければならない。また学習は直接経験から 理解と創造性の教育、生徒に自発的な学習意欲の啓発こそ重要であることはいうまでもない。

しかしながら、いかなる「育成」(カリキュラム、教授学習、順序、国家目的)であっても、効果は被教育者の先天的学習能力とその文化的水準がカリキュラムを受け容れるかどうかという教育の対象についての問題がある。科学的合理的思考方式に欠けた生徒にとって、新しい外来のカリキュラムをそのまま吸収するには困難があろう。たとえば後進地域の農村の父兄の知識水準が低いものに、そのまま、先進国のカリキュラムを与え、う吞みさせることは、当然消化し得ないのである。Wastage 率が発展途上国に高いのもこれが原因の一つであろう。

なお、新しい観念に関連して、アフリカのある国にみる面白い例だが、かなり厳重な問題である。それは農村におけるポンプ設備の使用を教えこんでも、二毛作にそれを使って耕作をしないその理由はこうである。つまり、「神がわれわれに雨季を一度しか与えてくれないのは、稲作は一度だけである」といった文化的遅滞の現象の例は極端にみえるが、旧い観念がいかに開発途上国の近代化を阻害しているかを示している。このことは、文化の先進国より、そっくり導入したカリキュラムや教育過程はもともと文化水準の高い人たちのために編成したもので、それを文化的に異質というか、つまりバックボーンの違う国にとつては、吸収できない。そのために、新旧観念との間に葛藤すら招くのも無理がなかろう。このように、発展途上国にとって、いかに、伝統教育制度から外来の新しい文化、適切な新しいカリキュラムを編成するかは、言語の統一と同じく、もっとも重要なる課題である。

3. 「産出」(out put) について

すでに「投入」「育成」について考察をしてきたが、ここでその「国家収益」である「産出」についてみることにする。投入されたもの、つまりカリキュラムが「育成」をとおしてその「収益」はやはり、その投入したカリキュラムの目標は何かがである。たとえば、国民の政治行動、社会風紀および社会組織はどうか、貯蓄やGNPの増加は教育計画の中心目的であるかどうか。これらは「産出」つまり、国の収益を測定する基本的根拠となる。これまで教育投資の測定は教材単元をもって計量されることはなかった。またカリキュラム(教育情報)を厳選して、投入と産出における関係を測定することもほとんどなされていない。たしかに、経済学者が教育モデルのメカニズチを造ることによって教育投資とGNPの成長関係を測定することに努めてきた。ところが、発展途上国における非伝統教育の「産出」の測定に関する研究開発は非常に期待されているにもかかわらずあまり見られない。その因難は伝統的旧文化の障害によるものであろう。先述したようにハンナは、国家教育投資、人的資本の創造の面で観察方法を説いている。ハンナによればカリキュラムの順序(教育情報の投入)は国家目的から教育機関と順序(育成)の処理によって被教育者の知能の一部分となる。これは、すなわち国家の収

益(産出)となるのである。さらに国家の収益はまた、反すう作用によって、再び「投入」 (課程)に還元して絶え間なき循環を示す矢じるしとなる。これがすなわち、国家人的資本成長の形態である。

(二) モラルと価値観について

発展途上国にとって、最も主要な課題は、なんといっても、工業化への離陸を加速化し、持続的に発展できるようにすることであろう。人的資源の発展がすでに資本形成のプロセスとみなされるようになってきたことから、教育投資の適切な運営、マンパワー需給の均衡、研究者比率の増加や熟練工の養成などは、こうした要求に応えるものである。しかし、これらの問題は決して純経済的な問題ではなく、それに伴う社会問題、とりわけモラルの問題がある。そこで、まず第一に家庭をとりあげてみよう。一般に台湾および東南アジアの家庭は、現在すでに伝統文化をバックボーンとする機能から改変しつつある。その特徴として多くの家庭の経済、福祉、娯楽、教育等の機能はすでに、家庭から社会の諸機構、たとえば、職業団体、社会福祉の団体組織、学校、文化関係組織や社会教育機構に移ってきている。これは、農業社会から工業社会に転移してゆく過程で、家庭の機能もこれに応じて変化せざるを得なくなったことによるものである。しかし、これら諸機能は決して、家庭の影響力が弱小化されたことを意味しないが、多面化したことは事実である。

次に第二の問題として取りあげられることは、職業団体に関するものである。変動しつつある社会や、職業団体には少くとも次の三つの機能がある。つまり、個人の経済理念の影響、社会成員の社会機能への育成、さらに社会の職種構造がそれである。これらの機能が働いている際においては、職業団体は政治および教育制度と適当な関係を維持してゆかなければ円滑にゆかないであろう。開発途上国においては、一般に、教育機能がまだ十分に働いているとはいえない、これは教育制度自体からの改革がなされなければならない課題であろうが、それには、教育発展が絶えず経済や社会の発展とタイアップしなければならない。また、経済発展も社会面からの問題と相関関係をなしている。モラルや価値観が社会問題の核心である以上、社会経済の発展にとって、これらの影響を多大に受けるのである。

いうまでもなく、経済発展の究極の目的は、決して経済資源の開発および利用だけではなく て、経済の歴史の経験を改変し、支配する人間自身のためこそ最大の目的である。それ故に、 社会成員のモラル、社会規範、価値観が問題にされるのである。そして、それは教育の革新か ら着手せねばならない。

(三) 文化統合の面について

教育の経済理論でも明らかにしたように、教育は人類の精神、知恵その他、社会全体の発展 に資する能力を啓発するのであることは、何人も否定できないことである。しかし、それには 文化統合のバランスをもつものだからである。文化統合は、科学発展のための「人文」分野を 提供し、そしてそれがまた「人文文明」の発展に科学分野の協調を受けるものである。ところ が一方,科学発展は、「人文」分野からの制限および「人文文明」発展における科学分野の制限という阻害を排除するのである。しかし、教育はなんといっても社会生産に順応するための人間自身のものである以上、上述の「科学文明」、「人文文明」の両方ともに発展させるべきである。西欧諸国にみられる科学および技術の急速なる進歩は、科学と「人文文明」の間に大きな距離ができている。こうした機械文明は、結局、工業化、経済発展のみに独走し、それが環境破壊、大気汚染などの公害で人間の肉体や健康を害する一方、精神面においては、工業化のために人間疎外の現象すら産みだしてきている。このように、先進国にみる科学技術の発展だけでは、人間の生存ができないことをわれわれに大きな問題として提起してくれているといえよう。

しかしながら、東南アジア諸国の一部をふくむ発展途上国の段階にある国々にとっては、科学技術の非常なおくれから、科学文化の発展を大いに努力しなければならない。ただ、「科学」または「人文」の二つの領域のどちらかに偏よるべきではなく、両者のほんとうの意味での統合を求むべきである。過去の中国における教育が人文だけに重きをおき、経済事情を軽視してきたことが、近代科学の立ち遅れから、経済発展にまで響きわたっていることは周知のとおりである。発展途上国が科学技術を急速に発展させる緊急課題であると同時に、両者の統合の方向をも探るべき理由である。

(四) 政治意識の形態について

ハンナのモデル図式の産出面に再び戻るが、産出つまり、国家の収益が政治の場合いかなる投入をするかによってきまる。たとえば、政治教育内容がヒットラーのものであるとすれば、戦前におけるドイツの国家社会主義の教育(路線)が結局ファシズムの政治意識と行為に継承されてゆくのである。孫文の三民主義の思想が、今日、台湾の教育目標の中にうたわれているが、その中の民生主義では未来の共産主義や社会主義の福祉社会および「大同の理想」を目ざしている。いかなる体制であろうとも、偏った政治イデオロギーの教育政策をとるべきではない。教育はもっと幅広く弾力性のある視野におかなければ、文化の多彩な創造的発展を阻ばむことにならう。F.ハービソンたちがすでに強調したように、人的資源の開発が近代化にとって、社会的、政治的、文化的あるいは経済的、あらゆる種類の成長にとって必要な条件の一つであり、開発の指標である。(4)

(五) む す び

以上、発展途上の国々の教育課題として、伝統教育制度、社会経済の発展、文化統合、そして政治意識形態について考察したがこれを次のようにまとめてみることができる。

- ① 伝統教育制度が近代化を阻み、新しい観念の樹立が急務とされていること。
- ② 教育制度の発展はマンパワー需給の均衡が先決であり、社会のモラルと価値観の高揚が必要とされよう。
- ③ 社会の発展は物質文明と人文文明の発展の統合を協調すべきであること。
- ④ 政治意識とその形態がその国の経済発展と密接な関係にあることなどである。

ところで、これまで論述してきた伝統的と非伝統的教育の理論と実際はただ「投資」という点に着眼したことによる検討だけに止める。しかし、教育の意義と目的は決してこれに尽きるものではない。教育が人類への貢献は、消費者が自分自身の力のおよぶ範囲内において自己の生存を図ることとまったく同じことである。教育事業は人類の願望に則って最大の努力を尽すことだけではない。また国家投資目的のためにのみ努力するべきでもない。現代教育の目標は、個人と社会の二重の発展が必要とされているのである。これまで多くの学者がこの問題に取り組んできたが、ほとんどといってよいほど、経済学の視点に立って人的資源の開発、とりわけ技術マンパワーに偏っていた。これは教育の独立性を欠き、経済に従属するもので疑問である。

しかし、教育が経済に従属しないようにするためには、教育自体の変革が必要とされよう。 とくに、開発途上国においては、先進国のものであれば何でも自国のために役立つといった論理が先ばしっている、また、一方においては伝統教育の旧い観念が存在し、葛藤すら起りうる。近年にみる台湾の教育の量的発展はすばらしいとはいえ、中国伝統の根強い「士大夫観念」をひき継ぐプロモーショニズムがある。このように開発途上国における教育の課題はそれぞれ多くの難問を抱えているが、教育はあくまで人間が社会の存続と人間自身の生存のために対応するのである。そのためには、まず飢餓、失業、貧困から逃れることが先決であり、バランスのとれた教育を実施することこそ真の意味での人間性の教育ではなかろうかと思われる。

何世紀もの間、開発途上諸国は、貧困、病弱、無知、停滞との中に強国の支配に対して抵抗 してきたが、もう彼らは再び植民地支配者の思うままの宰割にならないであろう。人口の過剰 も、マンパワーとしてその質が高まれば、それが圧力にはならないし、むしろ立派な資源とな るのである。その意味で、教育と経済を発展させることによって、南北の差が縮み、「大同の 理想」に近づけることこそ真なる自由と平等の名の下に繁栄、安定、平和の「一つのアジア、 そして一つの世界」に通ずる道なのである。

- 注(1) 拙稿「教育の経済理論に関する一考察」東京立正女子短期大学論叢第4巻5-22頁参照。
 - (2) Paul R. Hanna "Conventional and Unconventional Education for newly Developed Countries" 1962, Ibid: William J. Plat "Education-Rich Problems and Poor Markets, "Management science, Vol. 8, No. 4, figl. p. 410, July 1962, Eugenee Staly. The Future of Undereveloped Countries: Political Implications of Economic Development, Published for the Council of Foreign Relations by Fredrick A. Praeger, New York, 1961 (reved) especially Chap II "Human Resouces and the Organization Factors, "pp. 228-250.
 - (3) Ibid.
 - (4) F. Harbison, C. A. Myers, "Education Manpower and Economic Growth" McGraw-Hill Book Co., New York, 1964, pp. 11-14.

教授・学習過程の再考

一『授業のシステム化』をめぐって 一

田島富美江

Iはじめに

学校における教育活動の最も基本的な問題の1つである教授・学習過程の、教授者と学習者との諸々の関連についての研究は、ここ数年間特に活発に行なわれるようになり、単に教育心理学や学習心理学等の扱から心理的・環境的等の面からのみでなく、最近では教授・学習過程をコミュニケーションの1形態とみなすことによって、視聴覚教育はもちろん、情報理論やシステム工学等の分野からも研究がすすめられている。その結果の1つとして『授業のシステム化』というような教育の分野では耳なれないことばまで出現して来たようである。

本稿では中学校英語教育の中で、次第に取り上げられるに至った、いわゆる『英語授業のシステム化』に関する基本的な問題を考察し、併せて実践記録等に現われている現状が、果して学習の効率化を企る真のシステム化であるか否かを検討し、今後の英語教育の1つの方向を提示したいと思う。

Ⅱ 授業のシステム化について

そこで先づ、システムとは何か、授業のシステム化とは何かという問題から入らなければならないのであるが、その定義は専門の分野によってさまざまである。本来授業のシステム化の概念はシステム工学を基礎とする教育工学より生れたものであるために、その方面の定義を参考にするのが妥当であると思われる。それによれば、ある目標を設定し、それに到達するためにその内部の要因を相互に関連づけて、最適な状態に構成したものがシステムであるといえる。したがって授業をシステム化するということは、『教科の教授目標の達成を、もっとも効果的・効率的に行なうために、目標行動・教授内容・教授方法・施設・設備・媒体・教師集団・子供集団・学習形態などを、うまく組み合せて現実に授業を行ない、さらにその結果を評価して、各要因やその組み合せ方を改善し、絶えず最適の組み合せを求めていくことである。』「」という定義がもっとも適当であると考えられる。

次にシステムの単位の問題であるが、目標をどこに置くかというその単位の取り方は任意である。しかし一般的には、システム全体の統一目標を設定してもそれを一挙に実現することは不可能であるため、いくつかの下位目標を達成するサブシステムを置く。したがってこれらのサブシステムが相互に関連し合い組み合されて、大きなシステムの統一目標を達成するために

組織化されねばならない。また、サブシステムも1つのシステムとしての働きをするから、必要な場合にはさらに細かいシステムに分けられる。この最小単位に分析されたシステムを、常に大きな目標実現のために組織的に構成することがシステム化になるわけである。

教育の場合にも、1時間の授業を1つのシステムとみなすか、あるいは1年間の授業を1つのシステムとみなすかということは、各教師の考え方によって違いがあるが、通常1つの教育科目には統一された大きな総括目標がある筈であるから、それを1つのシステムの目標とみなし、各学年の目標がサブシステムの目標であり、そして各授業はさらにその下位のシステムとみなすのが普通である。したがってその最小単位のシステムの要因が、それぞれの目標に対してうまく組織化されることは重要なことではあるが、いかに綿密に組織化されていても、それがさらに教科の総括目標に対して組織化されていなければ無意味である。すなわち、最小システムが個々ばらばらに独立したものであってはいけないのである。これは完全な個体の集合が、必らずしも完全な統一体になるとは限らないことによっても理解できるであろう。

英語教育に関して学習指導要領を参考にするならば、その総括目標は次のように述べられている。『外国語を理解し表現する能力の基礎を養い、言語に対する意識を深めるとともに、国際理解の基礎をつちかう。』^[2] したがって1時間の授業という小さなシステムは、それぞれの目標に対してうまく組織化されているのと同時に、英語学習の総括目標達成という観点に立ってシステム化されることが、もっとも望ましいのである。故に、システム化を推進しようとする場合には、英語の授業を全面的にシステム化せねばならないことであって、1時間や2時間の小単位のものを断片的にシステム化しても、英語教育全体からみて効果は期待出来ないと考えられる。

次に具体的な授業のシステム化を考えてみよう。これには上述のシステム化の理論にしたがって目標を設定し、教授・学習過程を円滑に行なうことが基本的な条件である。すなわち教授者は、学習者の反応をコントロールすることが可能な刺激(教材)を提示しつつ目標へ到達させることであるということができる。必らずしも反応をコントロールしなくとも目標達成は可能であろう。しかし次の章で詳しく述べることであるが、コントロールすることにより教授・学習過程の複雑な要素をある程度排除して、単純化できることは事実であり、また時間的にも学習の成立という面からも効率的であることは疑問の余地はない。またコントロールを有効に行なうためには、フィードバックの要素が不可欠のものとなるのである。フィードバックとは結果に関する情報を与えるという意味であって、そのやり方は学習の種類によってそれぞれ異なるものである。例えばプログラム学習においては、学習育の反応がそのまま学習者へのフィードバックとなり、且つ刺激の働きをするのであるがシステム化による学習の場合は、教授者一→学習者と、学習者—→教授者のそれぞれの過程が絶えまなくフィードバック作用により連結され、循環的過程を経て学習を進めていくことを特徴とするものである。

授業のシステム化を考える場合には、上述のように可能な限り厳密な目標設定と、より確実

な学習者の反応のコントロール,および教授者・学習者への相互的フィードバックが大きな要素をなすものである。(ただし、学習者に対しては必らずしも「学習結果に関する情報」という明確な形で与えられるとは限らないが。)

しかし教授者は、教材提示の場合においても、フィードバックを受けたり与えたりする場合においても、機械装置の如く厳密に行なうことが困難であるため、システム化を行なうに当ってどうしても教育機器と結びつき易くなる。また教育工学、システム工学等ということばから、すぐ機器類の使用を連想される例も少なくないようである。実際、教育機器というものは、その使用法によっては教授・学習過程の効率化が得られることは確かであるが、システム化においては教育機器の利用はその前提条件でないことを常に念頭におかねばならぬことである。

Ⅲ 教授・学習過の再考

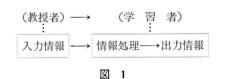
さてこれまで授業をシステム化する場合の大きな特徴について概括的に述べてきた。その他に学習環境、学習者の心理状態等々、システム化する場合に考慮せねばならない問題は数多く存在するのであるが、中でも教授・学習過程のあり方が占める重要性はかなり大きいものと思われる。教授・学習過程を効率化する方法として現在ではその過程をコミュニケーションの1形態として考察し、解明していこうとする方法がしばしば取られているのであるが、この章ではそれに基づいて、システム化された授業には特殊な教授・学習過程があるのかどうか、またあるとすれば、いわゆる一斉授業におけるそれとどの点が異なるのかを改めて考察してみたいと考える。

1. 教授・学習過程における2つの1方向的コミュニケーション

教 授 者 \longrightarrow 学 習 者 刺激(S) 反応(R)

従来,いわゆる一斉授業における教授学習過程は,教授者から学習者への教材提示の過程として,単純な刺激,反応の型(左図)の反復であると認められて来た。すなわち,教授

者の刺激はそのまま学習者に受け入れられ、何らかの反応を起して学習が成立すると考えたのである。しかしこれは教授者の学習内容の伝達と、学習者の受動的学習態度から成る過去の学校教育等で採用された教授・学習過程であって、学習の成立という点からみて、かなり有効性を欠いていることは周知の通りである。この考え方は刺激から反応に至るまでには外から観察



不可能な複雑過程のあることが無視されているのである。心理学をはじめ特に最近では情報科学の面からこの点の究明がなされているのであるが、 それによれば教授・学習過程は図1のように教授

者の発する刺激(入力情報)が学習者の情報処理過程を経て反応(出力情報)に至ると解釈する。

バーロ (D. K. Berlo)⁽³⁾ はこの過程を次のように分析している。学習にはある overt または covert respons が基本的な条件ではおるが、それだけでは反応の調節 (econtrol) が不可能で

あるから充分な条件とはいえない。学習がおこるためにはまづ本来のS-R関係はくつがえされるべきであり、刺激が認知されて反応がおこるまでの間に何かが起らねばならない。すなわち学習者 (organism) は中枢神経組織を司どる大脳を働かせてある決定をしなければならないのであるが、それが解釈 (interpret) の過程である。学習者は認知した刺激を解釈し、自分の力で反応を調節しなければ学習は成立しない、と。このように刺激から反応の起るまでの学習者の心的過程、すなわちバーロの interpret の段階は、通常情報処理過程とみなされるものであって、これはさらに細かく分析されることが必要である。同じ情報科学では認知の過程を含めて4つの過程をあげている。

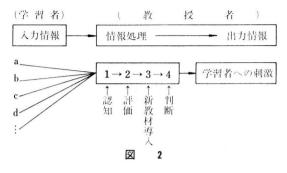


- 1. 入力情報を受ける段階, すなわち認知
- 2. 把持, すなわち記憶
- 3. 検索, 貯えた情報を必要に応じて取り出す
- 4. 判断及び決定

以上のような過程を経て反応が生じるのであるが、同じ刺激を与えても、それぞれの学習者の心的過程を経て出てくる反応は必らずしも同一とは限らない。その主体となる学習者は、能力、学習時の心理状態、家庭環境、社会的背景等々にわたって多様性を極めているために、学習過程を上述の如き教授者から学習者への一方向的コミュニケーションとして考えるならば、学習者は自由な情報処理過程を経るために、反応の種類も多くなり、極言すれば生徒の数だけの反応が現われる。したがってこのような一方向的コミュニケーションの場合には、問題解決学習のような場合においては、主体的、創造的な思考力が育てられ、比較的個性を伸ばす学習ができるかも知れない。しかし段階的ステップを1つづつ踏んで目標に到達させようとする教科、例えば英語のような教科においては、教授者の刺激に対する学習者の反応が、学習の目標からみて望ましくないものである可能性は充分考えられる。したがってかかる教科においては、この一方向的コミュニケーションは学習者にとっても教授者にとっても、非能率的といわざるを得ないのである。

これまで教授者から学習者へのコミュニケーションに複雑な過程があること、また複雑な過程を経なければ学習は成立しないといわれていること、また学習者側の種々の心的状態によって、起る反応はさまざまであることを述べて来た。しかしこれは現に大学等で行なわれている講義形式の科目等はこのコミュニケーションモデルに当てはめることが出来るのであるが、小・中学校の段階では受け手の能力という点からみてこの一方向的コミュニケーションでは非能率的であることは明らかであろう。その理由としては、これまで数多く指摘されているので、改めて全てを並べることは避け、特に本稿に関係あるものだけを次にあげてみよう。

- 1. 教授者の刺激により果して反応が生じたか否かが不明確
- 2. 反応が起ったとしても、それが正しいか否か不明確
- 3. KR(学習結果についての情報提供)が教授者にも学習者にも不充分であること(すなわちフィードバックがなされない)



次に教授・学習過程にはもう1つの一方向的コミュニケーションが存在することに注意しなければならない。それは学習者から教授者へのコミュニケーションであり、前述のものと逆の方向に向うものである(図2)。すなわち学習者の反応は教授者への入力情報となり、続いて情報処理過程へと移行する。この場合の情報

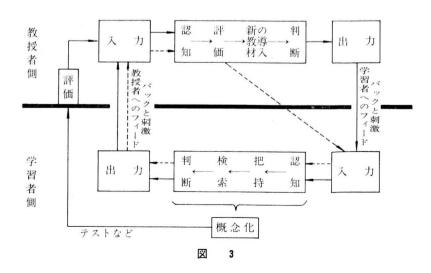
報処理は,学習者のそれとは異なるものであって,次の4つの過程に分析することができる。

1. 認 知 2. 評 価 3. 新教材の導入 4. 判 断 第1の認知の過程においては前述のように、学習者の反応は1つに限定されないから、教授者 えの入力情報は複数となり、したがって時には多くの情報を一時に認知し、評価する必要に迫られる。情報の数が多ければ多いほど認知が困難となり、その後の情報処理が不正確になり易いこと等は、コミュニケーションの大きな障害となるのである。さらに認知したものの正否を判断するばかりではなく、否の場合はいかなる訂正をするか等を考慮に入れる必要がある上に場合によっては次の新教材の提示と同時に送り出すこともあるわけで、教授者の情報処理過程は学習者のそれよりもさらに複雑な過程を経るものである。

以上, 教授・学習過程を2つの一方向的コミュニケーションに分析して考察してきたのであるが, 後者の方は理論上のものであって, 実際, 独立的に存在するものではない。

2. 教授・学習過程における二方向的コミュニケーション

そこでさきにあげた一方向的コミュニケーションの欠点を解消し、より効果的に学習を成立 させるために活用しなければならないのが、次に述べる二方向的コミュニケーションである。 これは教授者→学習者のコミュニケーションと、学習者→教授者のコミュニケーションを連結



し、循環的な過程を経て教育目標に到達させる方法である(図3)。このコミュニケーションに おいては学習者の反応は教授者への刺激となり、教授者の反応は学習者への刺激となって、前 章の2つのコミュニケーションは1つに連結される。そしてここにおいて学習者の反応のコン トロールと教授者・学習者への相互的フィードバックの要素が新たに加えられるのである。

順を追って考察してみるならば、この過程においては先づ学習者の反応、すなわち教授者へ の刺激を簡略化して、教授者の情報処理過程が可能な限り正確に行なわれるようにすることが もっとも重要なことである。ただしそのためには、教授者の情報処理過程から学習者への刺激 に至るまでの過程において、学習者側に望ましい反応が起るように厳密に計画された刺激を送 り出す準備が必要である。この刺激によって,学習者の認知過程はコントロールされ,各学習 者の反応は、教授者の望ましい反応に近いものが出される結果となる。教授者はこれを自分へ の刺激として認知するのであるが、それは同時に、教授者自身の提示した刺激に対するフィー ドバックの働きを兼ねるものであって、これにより学習者への刺激が適当であったか否かの判 断が可能となるわけである。認知したものを評価し次の段階に移行するのに2つのルートがあ る。第1は評価したものを即時に学習者にフィードバックする場合(点線),第2は反応の正否 のみを明確にフィードバックするのではなく,新教材の提示とともに何らかの形でフィードバ ックする場合(実線)である。第2の場合には学習者へのフィードバックと新教材の提示(そ れも学習者の認知の過程をコントロールできるもの)の要素が絡み合って学習者への刺激とし て送り込まれる。学習者の認知過程をコントロールして望ましい反応を引き出すことが可能で あることは実験でも明らかにされていることであり、また学習者が望ましい反応をすることは 学習を促進する上での心理学上の原則とも一致すること等は、改めて記述する必要はないであ ろう。とにかく学習の効率をはかるためには図3のような過程が循環的に進むことが望ましい のである。

次に評価に関して一番外側の線はテストのようなものを意味しているもので、教授者と学習者との間で行なわれたコミュニケーションによって学習者にはある概念が蓄積され、それがテスト等の手段によって教授者へフィードバックがなされ、教師はそれを評価して何らかの方法で学習者にフィードバックするという関係である。

以上が教室におけるいわゆる一斉授業時の望ましい教授・学習過程であって、現在の教育活動は単に教授者からの一方的な知識の伝達ではなくて、この二方向的コミュニケーションですすめられることが最低限度の必要条件であるといっても過言ではないであろう。したがって『一斉授業は一方向的コミュニケーションであるため、教授者は学習者からのフィードバックが得られない』というのは根本的な誤りである。また、『教育機器類によらなければフィードバックを正確に得られないし、また与えられない』ということも誤りであって、有能な教授者であれば学習者達の何げない活動、表情、発言などからも多様なものを見出し、次の教材提示に役立てることができるはずである。そして本稿で最初に述べた授業のシステム化は、まさにこの学習過程が基礎をなすものなのである。

Ⅳ 授業のシステム化の現状

最近の英語教育専門誌等には、英語授業のシステム化に関する解説や実践報告等がしばしば 掲載されるようになり、それだけシステム化に対して関心が高まっていることを物語ってい る。中には真剣に取り組んで居られる立派な研究報告もみられるようである。しかし、いかな る教授法においても次の2つのマイナス面の特徴がみられるようである。第1は、新らしく提 唱された教授法の初期においては、学問的理論づけが十分なされない段階において、実践に移 行してしまうこと、そして第2は、理論的基礎がかなり固まった場合においても、教師自身が 研究不足のまま実践に入ってしまうことである。

英語科の授業のシステム化に関してのべるならば、その歴史はまだ非常に浅いもので、理論 といってもまだ確立したものではないといっても過言ではないであろう。現在各方面で提出さ れている実践例も恐らく試験的なものなのであろうから、それらを正面から批判することは避 けるとしても、実践者達の取り組み方の姿勢に、かなり疑問に思われる点がみられるのであ る。

『授業に機器を導入するというシステム化は――』とか、『一斉授業に対して、システム化の授業にはエリを正して取り組まねば――』という類の表現はしばしば見聞することであるが、ある研究報告の中で次のような文にぶつかった。『必要があって同一目標の授業を、従来の方法と、システム化の方法で比較する研究授業を連続して行なった。指導案2つを作成する段階で気づいたことは、システム化された授業は、学習者を主体として指導案の段階から計画されるということにとくに注意が必要だということである。――』このような考ええ方は、英語科の授業のシステム化に対する現場の教師達の現状をもっとも良く象徴しているように見えるのである。

学習者を主体にした指導案、これは単にシステム化する授業においてばかりでなく、一般的な普通授業の指導案作成の場合にも、常に念頭におかなければならない基本問題であるし、また特にシステム化の授業であるからといってエリを正すような姿勢も不可解であって、いかなる授業においても教師はエリを正して向わなければならないことは今更のべる必要もないであろう。そしてまた教育機器を導入することだけが授業のシステム化であると誤解している例もしばしば見受けられる。

多くの教師のシステム化に取り組もうとする強い気持は充分認められるのであるが、現代の教育要求はこの教授法だけでは応待しきれない面を数多く抱えている。したがって1つの教授法のみに限らず、いかなる教授法にも真剣に取り組みその長所を有効に教室授業に活用することが望ましい。

いわゆる一斉授業においても、教育に関する大きな構想や、目標設定を持たない教師は恐らくないであろう(但し、目標設定が大ざっぱになり易いし、また大ざっぱでも間に合う場合もあることは確かであるが)。そしてまた授業は単に知識を与えるものと考えている教師もないであろう。しかし学校における授業は、学習の効率化という面のみを考えるだけでよいだろう

か。多くの生徒の中で勉強して努力していくことも充分必要ないことであろうと思われる。

V か す び

現代のように学習内容が急速に高度化し、併せて教授法も多様化して来ると、教授・学習過程を科学的にとらえて、学習の効率化をはかろうとする全り研究不足のまま新らしい理論や教育機器類に飛びつこうとする傾向がみられるが、それが却って学習の効率化を妨げる原因にもなり兼ねない。授業のシステム化それ自体の基礎的理論が固まっていない現在において実践に移るのはやや早計ではなかろうか。教育機器の1つ1つについても、その充分な使いこなし方もまだまだ今後に多くの問題が残されている今日、それらの機器を授業のシステムの中に取り入れることからして無理があるように思われる。

英語の授業をシステム化する,これは英語教育の1つの方法として認められてよいことである。但しその前になすべきことが山積しているのではないだろうか。やたらに新らしいものに飛びつかず,古典的ともいわれる教授法を地道に研究しながら進んでいけば、自然に機器を有効に導入する技術が身につき、また自然に授業のシステム化も取り入れられるようになるのではないだろうか。

『授業のシステム化はこれこれである、ないしあるべきだという結論を早急に求めてはならない。また、いわゆる「システム化」がつねによい授業を保証するわけではない。具体的な事例に適切でないモデルをしたじきにしたシステム化は、授業を形骸化するはたらきしかもたないであろう。まして、授業をシステムとしてみることが、ただちに機器の導入を意味するわけではない。システムモデルにしたがって、そもそも機器の導入が必要か、可能か、必要かつ可能だとしたらどのような機器を導入すべきか、ということが検討され、さらに機器の導入がシステムにどのような変容をもたらすかが商量されるのである。』(4) この東洋のことばは今日のシステム化の現状をきびしくいましめているものと考えてよいであろう。

21 🏻

- (1) 坂元昻 現代教育科学 No. 157 授業のシステム化の原理と方法 明治図書
- (2) 文部省 中学校指導書 外国語編
- (3) David K. Berlo The Process of Communication
- (4) 東洋 教育工学講座 3 教授学習システム 大日本図書

日・英対訳の問題点

--- 語学教育の一考察---

近藤久美子

Aという国で使っている言葉と全く同じ意味・用法をもったことばを, Bの国の言葉の中に 見出す事はどの場合も,必ずしも常に可能ではない。殊に日本語という非常に特殊な言葉(の 様に考えられている言葉)を英語などで,その言葉のもつニュアンスを含めて,説明がつくも のだろうかと疑問を持つ人があるのは当然であろう。

語学教育というものは、英語は英語で、又日本語なら日本語で教える、教えられるというのが理想であろう。理想である以上、例えば、日本語なら、相手が英語を母国語としている者でも、英語で、(日本語を)説明されるのは無意味な事であり、又その日本語を習う学生は、教師が出来るだけ日本語で教えてくれるのを期待しているわけであるから、英語訳の問題点という事になると、なんだ、あの教師は日本語を英語で教えるのかと誤解するむきがないとも限らない。

又,逆に英語を教えるのに,例えば,その英語の発音が悪かったり,日本語ばかり使って説明する日本人の英語教師は学生から馬鹿にされようし,それどころか,有害である時もあるわけであろう。たとえ初級の者にでも,その学生の母国語はなるべく使わない事が理想であるが,我々も日本人として,ある外国語を学習していた折に,教師が英語を英語でばかり説明していても,ピンとこない箇所があったりすると,そこでつまって何となく意味がつかめない,そんな時に教師が若し要領のよい日本語でチョット説明してくれたら,そこでその構文がすらすらとのみこめて自分のものになったという経験は誰でもあったと思う。そういう観点から試みる英訳の問題点であるわけなのである。であるからこの英語訳の問題というのは或る意味でTeaching の消極的な面であるとも考えられる。

日本人にとっては、日本語は母国語であるから、つまり空気の様なものであるから、教えるという立場にたたされる迄は、日本語というものを、外国語の様に客観的に考える事は難かしい。日本人は誰でも日本語の教師になれるというわけのものではない、日本語を客観的に考える能力を養うための勉強が必要になる。「語学」というものには一種共通したものがあって、或る外国語を専門に勉強し、かつ教えていると、自然に自分のやっている専門の外国語と日本語とを比較対照してみたり、又は比較検討して行く様になるものでもあるから、自分が空気の様に使っていた母国語をあらためて客観化し、語学として考える様になる。そうして自分は日本人でありながら実に自分の国の言葉日本語を知らなかったのだなという事に思い至り、それ

を客観的に分析して本質を、日本語の本質をつかみたいと言う気持になろうと思うわけである。そうして、これが、日本語を、国語としてではなく、一つの外国語として考えて行こうとするきっかけにもなろうかと思う。そこで、これから述べる事は日本語から英語へとかえて行く際の対訳における問題点であって、翻訳する時に於ける問題点ではない事をおことわりしなければならない。英語を母国語とする人、若しくは英語を主な言語手段として社会生活をしている人が、日本語を外国語として学習する場合に、その学習をより容易にする一つの手段として、その Situation をも含めて英語の対訳を試みる事があり、その場合に起る問題点であるという事、そして、ここにとりあげた問題は、私が過去に於て、いくつかの大学で、英語を母国語とする人を対象として教えていた間に起ったもの、又起ると予想されたものの中から、とりあげた問題点である事も、おことわりしておきたい。

実際問題としては、学生の理解を助ける為と思って与えた English Equivalent がそのまま 効を奏する事もあるが、うっかりすると、却って誤解を招く事もあって、対訳の仕事はなま易 しいものではない。これは適訳と思って使っていても、教師の自分も、そして学生の側も気ず かずに、知らずしらずの中に誤解を生じていた場合もある。それらを思い出すままに御披露しようと思う。

あとで反省してみて、どこにその問題点があったかと言えば、訳のつけ方が単純すぎたとか、 余りに意訳になりすぎたとか、Situation の説明が不充分であったりする場合に起った事が多 い様に思われる。教師の側で、果して学生が、誤解なく、その日本語の言いまわしとか、慣用 語とかを理解しているかどうかのよい発見法の一つは、その使い方を、多くの用例を挙げなが ら説明して後に、それを使って学生に文章を言わせたり、書かしたりしてみる事だ。つくらせ てみると、ある程度誤解を防ぐ事が出来る様に思われる。

太宰治氏の小説「斜陽」の中に出てくる女性が、「白たびをはいて、でかける」という文章をどう訳すかと言う事で、白たびというのは足ゆびの先の所が二またにわかれている whitesocks の様なものであると理解させても――実物を見せてもよろしい――「白たびをはいてでかける」という事がそれだけでは何を意味するか全然あらわれていない。つまり、 whitesocks をはいてでかけると説明すると、それはむしろ、彼等の間ではゴルフかテニスに行くとか、散歩に行くとか、我々であったら、台所働きをする時にはく事はあっても、よそゆきの着物を着て、白たびをはく事にはならない。むしろ、それでは「色たび」をはいてでかける事になってしまう。日本では白たびをはいてでかける事は、Formal な格好で、Formal な所へでかける事になる。それを Situation として加えて説明するのでなければ、この文章の説明にならない。

ところで、その白たびをはいてでかけると言うのを、Donald Keene 氏が、「White gloves をはめて でかける」と意訳されたのを、それを又、Seindensticker 氏が、「日本語らしい日本語から英語らしい英語へ」という本の中で、大変感心して引用されているという意味の事を 阪倉篤義氏がその講演の中で述べられた事があった。私の 考え では、「白たびをはいて」を 「White gloves をはめて」とまで言ってしまうと、これは、翻訳の問題点の領域であって、

私の課題とかけ離れてしまうのであって、あくまでも学生の学習を助ける為の English Equivalent であるから、行きすぎた意訳をすると、そそっかしい学生は、白たびとは White gloves の事かと思わないでもない。くり返して言わせて頂くと、私の課題は、あく迄も、外国人の日本語を学習するに際して、その理解を助ける為に使う対訳であって、翻訳の問題点ではない。

例えば、日本語の「お早よう」は"Good Morning"ではなくて、It is early の意味であ ると、あると国語学の先生が教えて下さった事があるが、これには一理ある様に思われる。英 語の Good Morning が使われるのは、私の調べた所では、彼等の間では10時過ぎても、午 まえであれば、その日の最初の Greeting として "Good Morning!" と言っている様だが、 日本語の「お早よう」と言うのは、精々朝の十時位迄が限度で、陽が高く昇ってからは使って いない様である。「お早よう」が説明ぬきでは、Good Morning!にならない様に「おやすみ なさい!」も "Good Night!"にならないと思った事が幾度かあった。英国系の人や、米国の ある地方から来た人達は、午後の四時頃から、その日の最後の挨拶として Good Night! を使 う。私は永年の間、ある外国人ばかり働いている社会で暮している中に、Good Night!が、 「おやすみなさい!」ではなくて、むしろ、「さよなら!」なのだと感ずる様になった事がある。 こうした習慣の違いから,使い方,使う時間まで違ってくるという事実。こうした使い方の違 いは日本語と英語の間には、実に数えきれない程ある様に思う。長沼の読本にもある「あなた は指を何本持っていますか」という。 その答えとして,「五本あります」などと言うと,英語 国民の中には、「いや四本しかありません。 Thumb は Finger ではありませんから」と言い 出す学生もあり、議論が始まったという様な場合もあったときいているが、この様に考え方、 語彙の範囲の違い、習慣の違いと言うものがあるのだから、大変用心してかからねばならない 事になる。

英語の Equivalent をさがすのに、しばしば、和英辞書の厄介になる事があるが、和英辞書にある言葉を、そのままうのみにすると、とんだにえ湯を呑まされる事がある。私は早稲田大学語学教育研究所にいて、中級のテキストの作成に従事していた頃、そのテキストの材料の中の英訳を担当した事があり、その中に、例えば、

海苔、トコロテン、お豆腐、こんにゃく、ごぼう、ふき、みつば、わさび等々から、ちらし、おしずし、おでん、かばやき、てりやきなど料理したもの、更に植物の名前、くぬぎ、けやき、すすき等々を調べていて気がついた事は、和英辞書にあって、英和や、English-English にはないものがあるという事である。

例えば海苔は和英辞書に依ると

のり一"Laver; sloke; dried seasoned laver"となっているが、英語国民は、こんなものは知らないと言う。Webster なり Oxford で調べてみると、"Laver"は a kind of water plant ではあるが、いわゆる青草(あおくさ)であって、日本の海苔とはほど遠い。Sloke に

-3 -

至っては、辞書に存在していない言葉の様だ。海苔などは、Sea Weed が一番近いものの様で Sea Weed と言えば、「ああ あれか」とわかってもうえるし、実物をみせてやるにしかない 代物であろう。然しながら、実物を見せればよいと言っても、それを印刷にする、つまり文字にして説明する時の事も考えねばならないから問題があるわけである。又いくら実物を見せると言っても、トコロテンやお豆腐などを学校の教室迄、満員電車や、バスにゆられて運ぶという事も、おっくうなものは、折をみて食べさせてみるという手もあるが、さし当って、英訳という問題になると、大変ゆううつにならざるを得ない。和英に依ると、

お豆腐一"Bean curds: Cheese cack made of soya beans. トコロテン一"Gelidium Jelly. テングサ Gelidium Amasii からつくる"とあるが、こんな説明がどの程度役に立つか疑問である。吾々日本人が好んで食べる午蒡も英語なら"Burdock",蕗は "Rhubarb"であるが、辞書からもらって英訳してみた所で、げんみつな意味では、異るものであって、実物をみせた上で、食べさせてみなければ、本当の所は判らないという事になる。ごぼうを Burdock にしてしまうと、あれは西洋の毒にんじんの様なものであるから、日本人は毒草を好んで食べる人種かと誤解されないとも限らない。又日本の蕗は、あちらの Rhubarb ではない。この他みつばとか、わさびとか日本にあってあちらにないもの、又食物の材料に限らず、出来上ったもの、おでん、ちらし、おしずし、かばやき、てりやき等々が、すきやき、てんぷら同様、将来国際語になってくれれば、教師たるものいくらか楽になろうが、それまでは、説明で頭が痛くなる料理法である。この他

くぬぎ—a kind of oaktree

けやき-zelkova tree

などあり、これらの説明が果してどの位役立つか疑問である。 すすきなどは、和英辞書は "Pampas Grass"と教えており、これは英和辞書にも載っているが、Pampas Grass なるものは実は日本のすすきとは程遠い、フゼイでありまして、アマゾン川流域に生い繁る巨木の様に高い水草なのである。

結論として、和英辞書も、そのままでは、うのみにできないし、与えられている対訳は日本 語のそれとは必ずしも同一のものではないと言う事である。

もう一つ辞書と関係があって、その選択に困る場合がある。その例の一つとして、例えば「栄養士」という言葉は一見してすぐ和英辞書がそのまま役に立ちそうな日本語であるが、ちょっと辞書から拝借すると Webster は Dietitian であり、Oxford は Dietist が加わり、和英は Nutritian Technitian とか Nutritian Specialist とあり、その選択に――若し純粋に辞書に頼るとすれば――困るであろうと考えられる。

辞書を使って比較的簡単に説明のつくものや、実物に依って示せるものはまだよいとして、 そうでない抽象的なものには、かなり問題がある。

例えば、日本語の「留守番」という言葉、説明が不充分であると、留守番とは、Baby-sitter か倉庫の番人か、宿直か、空家の番人になったりするという思いちがいをさせてしまう。いや、

- 4 -

そうではなくて、例えば家族が総ぐるみで、半日乃至一日以上家をあけて、旅行に行く様な場合に、誰か家族の一人が残って、その家を take care するか、誰か知人・友人に来てもらって、その間 家をみてもらう人、その人を留守番というのだと説明するとする。すると、その範囲では「番守番」の意味がわかってもらえるが、更に学生の間から手があがって、「そんな事を、その少女にさせるのは、かわいそうだ。何故日本では、その少女も一緒に連れて行ってやらないのか」という批評が出たそうであるが、これなどは、我々日本人と欧米人の日常生活のあり方、考え方の相違、ひいては家の構造の相違にまで問題が及んでくるというわけである。

I. C. U. で作成された日本語のテキスト "Modern Japanese For University Students" (L. 33, P. 312) の中に「研究室」—[Professor's] Office となっており、Professor's が〔〕で囲んであるから、若しこの本を独習用とし外国の学生が使ったとすると、Office とは「研究室」の事と思いこむかも知れない。然し英語には Dentist's Office もあり会社の Office もあら合いであるから、会社の Office は「事務所」となり、医者の場合には「診察室」となるのであるから、用例を挙げて説明する必要があろう。

「おみやげ」という言葉も、日本語独特のものである。 これなども Souvenier と訳す事があるが、英語の Souvenier は記念品の事である。Webster に依ると、

Souvenier: to come up: to come to mind

That which serves as a reminder: memento oneword

となっている様で、日本では、おみやげは、人にあげるものが、「おみやげ」になる。旅行先から帰った人が、他人にあげるもの、若しくはAさんがBさんを訪問する時にAさんが持って行くてみやげの様なものがおみやげになるのであるから Souvenier とはチョット、ニュアンスが違うわけである。Souvenier はある記念として自分自身の為に手に入れたものも、それになるのであって、必ずしも人にあげるものとは限らないからである。そうして人にあげるものがおみやげだからと言って、Present は Souvenier とは同じではないし、Souvenier を Present する事はあっても、Present は Souvenier にはならない。「550 ないから、「おみやげ」は「おくりもの」ではないから、「おみやげ」を Souvenier と説明したとしても、Situation を加えて説明せねば、誤解を招く事になる。国語辞典をみると、

みやげ(土産) 1. 旅先から買って帰る物

2. 人を訪問する時特って行く物

3. てみやげ

とある。

早稲田大学中級の教材の中に、「とまどう」という言葉が、ある一つの課の中に幾度か出てくる。それにつけた English Equivalent が、ある箇所では"to be embarrassed"になっており、別の所では"to be at a loss"に、又別の所では"to hesitate"となっている例がある。これは前後の文章の関係で、この様に当然違ってくる例である。原作者が、くせの様に「とまどう」という言葉を無意識に近い状態で使っている場合、それぞれ前後の文脈の関係で

言葉のもつニュアンスが違うから、とまどうという一つの日本語も、こうした、いくつかの対 訳が当然出てくる。

これを逆に英語から日本語になおせば、to be embarrassed は「困惑する」とか、「当惑する」という意味にかわるし to be at a loss なら「途方にくれる」となろうし、to hesitate なら「ためらう」「チュウチョする」の意味になってしまうが、前後の文の関係で、こうした対訳の差があってもさし支えないと私は考える。

「家をあける」と云う表現にも、少くとも二つぐらい用法の相異がある。「家を出て留守にする」場合と、「家をあけ渡す」場合と文脈の関係で意味が違ってくる。然し家をあけるは、あるアメリカの学生が考えていた様な"Open House"の事ではない。「まどをあける」事が"to open the window"なら「家をあける」は"to open house"でよかりそうだと言いかねない学生があるが、「いえ(乃至、うち)」をあける事が日本語独特の言いまわしである様に、"Open House"も亦全然意味を異にする英語独特の言いまわしである。日本語のそれは「家を留守にする」事であり、又別の意味で、家賃の滞納か、何かの原因で「家をあけ渡す」事になろう。又同じ「あける」でも、「店をあけるのは何時ですか」のあの「あける」と同じ Openでも「店を開く」と言えば、「商売をはじめる」意味になるから、「まどをあける」と「まどをひらく」とが同じ意味を持つとしても、「店」の場合には「窓」とは意味が違ってくる。

この他 工事中・新築中・改築中がいずれも同じ"Under Coustruction"となっているとしても、それぞれみな違う意味をもっている事に注意しなければならない。

「出来るだけ」と「なるべく」が as much as possible ではあろうが、各々の日本語のニュアンスは違う。「できるだけ」は文字通りだと、"to the utmost extent one can do"であり、「なるべく」は"if possible: within the possible limit one can do"で

- a. できるだけ都合をつけて行く様にします。
- b. なるべく都合をつけて行く様にします。
- a. できるだけ早く走った。
- b. なるべく早く走った。
- aは力限り走っているが、bは力の限り走っている事には必ずしもならない。
 - a. できるだけたくさんください。
 - b. なるべくたくさんください。

なるべくと言えば、出来る事ならという譲歩がある。

日本語で「敬遠する」とは、岩波の和英に依ると、

- 1. to keep a person at a respectful distance
- 2. to give a person a wide berth
- 3. to kick a person upstairs

とあり、更に"He is politely shunned by everybody"という説明が付いているが、私個人の考えでは「敬遠する」などという言葉は、漢字の「敬」と「遠」の意味を語順に説明すれ

ばわかるのではないかと思う。その人を敬って、遠ざけて、避けている事だと言えば判る言葉 ではないかと思う。漢字を語順に説明した方がよいと言うわけは、英語の上述の説明では、心 の中で敬まっていなくても、表面うやっている態度で、意識して、その人を避けている事が出 ていない様に思われるからである。国語辞典は、

- 1. 表面敬まった様な態度をして近ずく事を避けること。
- 2. 親しめず近ずきにくく思うこと。
- 3. 意識して避けること。とある。

「家をあける」の場合と全く反対で、こういう場合は、言葉の本質に戻って、そのまま日本語 で説明した方がよい様に思われる。

英語対訳の問題点は以上述べてきた様な単語の問題から、更に助詞・動詞・助動詞などを含んだいわゆる言いまわしにもっと問題がある様であるが、言いまわし・用法の点で対訳を行う場合で誤り易いと思われる点を少し指摘したいと思う。私は日本語の構文は、英文法ではわり切れないと考える。然し便宜上、「日本語では、こう言うけれども、英語ではこうなっていますね」と言った程度の事は学生が自分の国の言葉の構文と、日本語の構文とを比較する時に助けになると思う事もある。

一番単純な Form であると思われている,「一です」「一ます」「一にいます」「一にあります」「一はある」「一がある」「一である」「にある」。「これは本である」「AはBです」と言った様な構文からして、日本語と英語ではギャップがある様だ。例えば、「これは本である」というのを、これは"This"で本は"Book"で、あるは"is"に相当すると説明したとする。ところが、"This is red"では"red"は「赤い」という色の意味だとすれば、"This is red"は「これは赤いである」にはならない。

- 1. "This is a book" ……である
- 2. "This is red"0
- 3. "This is in the room" ……にある

上述の場合、日本語と対照してみる時、Be-動詞の Function はそれぞれ違うからである。「である」の代りに「です」をもってくれば「これは本です」「これは赤いです」と成り立つ様であるが、今度は、"This is in the room"は「これは部屋にです」にはならないわけで、こんな簡単に見える形式の構文ですら、初心者には English Equivalent はあてはまらない。 "This is a book"である時「これは本である」となっても、"This is red"は日本語なら、"This/red"で「これは赤い」となるわけである。英語では"a book"も"red"も同じくcomplement 補語ではあるが、げんみつに言って Be 動詞のあとにくる"a book"というnoun 名詞と"red"という adjective 形容詞がくる場合にはこの Be-動詞が同じ copulaであっても Function は違うわけである。この際"is"なる動詞を「です」であるとしても、

- 1. She is Mary 彼女はメァリーです。
- 2. She is beautiful 彼女は美しい (です)。

でよきそうにみえるが、3. She is in the classroom になると、"is"なる Be 動詞はもはや「一です」でも「一である」にも相当しないものになる。現代日本語はなるほど、「メァリーです」「美しいです」となるが、古い使い方では、「彼女はメァリーです」は"She is Mary"として成立しても、"She is beautiful"は日本語の元の形にすると、「彼女は美しい」"She/beautiful"で足りるわけである。こういう風に一番簡単と思われる"A is B"という構文ですら単純に英対訳はできない。何年か前に英国の文法学者が中国人の為に書いたある文法の本では、この Be 動詞の Function の違いを、事細かに説明したものがあつたが、それは英語と中国語の間のギャップを説明したものであったと思う。若し日本語と英語を対照すると、別の角度から文法的な説明が出来るのであろうけれども、今、私はここで Be 動詞の Function の違いを述べるつもりはないが、要するに、こういう風にごく初歩の段階と思われる、その始めから、日本語の構文を、英文法ではわり切れるものではないと言う事を言いたかったまでである。

そういうわけで日本語の構文は独自のもので、これを英文法の角度からは説明する事は不可能である―現在の段階では不可能であると考えているので、日本語と英語との文法的比較対照は避けたいと思う。

「~ではなくて」と言う用法も使うのが難かしいものの一つである。

- 1. 「あの人は日本人ではなくて中国人です。」
- 2. 「あの色は紺ではなくて黒です。」

上の二つの「~ではなくては」は not~but で説明できるが、3. 「あの場所はしずかではなく てうるきいです」は上述に属すが、4. 「あの場所はきれいではなくてうるきいです」になると、もはや not but ではなくて、besides の意味になる。"That place is not clean, besides it is noisy" つまり、 しずかではないという裏側の<u>うるきい</u>という同質のものがくれば、not but ですむが、きれいでないとうるきいの様な異る性質の形容詞がくると、きれいでない<u>うえ</u>にうるきい」という意味である事を説明せねばならない。更に

5. 「私は専門家ではなくて、よくわからない。」

というではなくてはではないのでという意味になる。そういうわけで、「ではなくて」という言葉などは、英語で説明するよりは、同じ用法のものを、まとめて、順次会得きせて行く方が無難の様に思われる。

英語を専門に勉強している人ならすぐ気がつく事で、「あなたは泳げないんですか」 若しくは「泳げませんか」という Question がこの様に Negative の形式でなきれる時に、英語国民はその答えに於て殆んど日本語のそれと正反対の反応を示す。ある人がこの問題に関して、日本人はききての予想に対して「はい」「いいえ」を言うのであって、必ずしも英語国民と正反対の答えをするわけではないと私に教えてくれた事があった。勿論英語に於ても、ききてがある予想をして Question を発する場合がある。その場合は大抵 Tag Question の形式をとる。

例えば

と言えば, "He doesn't have money, does he?" と言った形式をとり, この場合予想通りもっていなければ,

「ええ, もっていません。」

"No, he doesn't" となり

又予想に反してもっていたら

「いいえ, もっていますよ。」

"Yes, he does" となる。

私の問題とする所は、純粋に、つまり予想なしにきいている場合でも、つまりききての予想を許きない純粋な Question であっても、英語に於いては、その答えの形式は一致するわけであるが、日本語に於ける「はい」「いいえ」は、その都度変化する様相をもっていると言う事であって、その答え方が日本語と英語では、勿論一致する事があるわけだが、多くの場合、そのQuestion Form が Negative でなきれる時に、日本人と英語国民とでは、その反応の仕方が正反対を示す事が非常に多い事を指摘したいと思う。つまり英語では、ききてが予想する事があっても、なくても、又 Question Form が Negative であろうと Positive であろうと、答えが Affirmative であれば "Yes"であり、答えが Negative であれば、"No"である。つまり答える側は、極端な言い方をすれば、自分の答だけ考えていれば、いいわけである。所が我々日本人は、話の内容に対してではなく、最後にくる言葉に対して「いいえ」とか「はい」とかいう返事をする傾向があるから、「あなたは泳げますか」"Can you swim?"と言った様な Question に対する答えは簡単に English Equivalent がでる。が、「泳げませんか」。「泳げないんですか」"Can't you swim?"と言った様な Negative 形式で Question がでると、

- 1. 「はい、泳げません」 2. 「いいえ、泳げます」
- 1. "Yes, I can't" 2. "No, I can"

という具合になる。そして、この英語は誤りである。正しい英語は" \underline{No} , \underline{I} $\underline{can't}$ "" \underline{Yes} , \underline{I} \underline{can} " でなければならないのに。英語では、" \underline{No} " は否定であるから、次に続くものは、" \underline{I} $\underline{can't}$ " でなければならず、" \underline{Yes} " は肯定であるから、あく迄も、次に続くものは" \underline{I} \underline{Can} " でなければならない。

日本語の<u>られる</u>の形も、それをそのまま English Equivalent に置きかえると、形の上で英語国民が疑問に思うのではないかと考えられるものがある。

- 1. お茶を出す→お茶が出される。
- 2. 先生は学生を教える→→学生は先生に教えられる。
- 3. 本 \underline{v} カバンに入れる \longrightarrow 本 \underline{u} カバンに入れ \underline{o} れる。

上述の様なものは、そのまま主語と目的語が入れかわって

- 1. Tea is served.
- 2. The Students are taught by the teacher.
- 3. The book is $\begin{cases} placed \\ put \end{cases}$ in the bag.

と言う具合に問題はない。が次の様な例になると、ある場合には疑問をもつだろうと思う。

- 4. 昨夜どろぼうがあの人のお金をぬすんだ。
- 5. 弟が、私のりんごをたべた。

上述の文を能動体から受動体にかえる時に、それぞれ二種類の英訳が考えられる。

- a. "His money was stolen by a thief last night."
- 4. b. "He had his money stolen by a thief last night."
 - a. "My apple was eaten by my little brother."
- b. "I had my apple eaten by my little brother."

上述の中 a の形の方は問題にならないが、"had—done" の形にかえると問題が起り易い。この際学生には日本語の <u>られる</u> Form に於ける ②と② の関係をよく理解させる必要があり、それには用例をいくつもあげて、日本語の <u>られる</u> Form に な れさせる事が第一条件である と思うが、同時に教える立場にある人は、この日本語の<u>られる</u> Form が 英語 のそれとは、違う事をよく承知されて臨む事が必要ではないかと思う。

(私は)子供に時計をとられた

- a. My watch was taken by a child.
- b. I had my watch taken by a child.

上述のbの文に於ては、主語は the person affected で direct object は thing taken で Agent 即ち行為者は、それをとった者、the person who did the taking になるわけである から、"I had my watch taken by a child"とbの文の様になるわけで、この形を示すと、学生は疑問を起すだろうと言うわけで、英語の Passive Voice と日本語のられる Form は大部違うという事を承知しておかねばならない。日本語の受身の形は、しばしば unfavarably に誰かが誰かに、又何かに Affect きれるという事があり、そして、られるのは、大抵「人」であるという事である。この"had—done"の形は"had—infinitive"とは違っているが、"had—done"は英文法では、Passive Voice の特殊用例として扱っている 学者と Verbals の中の Participle の用法の中に入れる学者とあり、私の調べた範囲では、Passive Voice の項目の中に入れるよりは、Verbals の Participle 用法の中に入れてある例が多い。

日本語で「田中さんに電話をかけられた」と言えば、その言葉の中には、<u>かけられた</u>事で迷惑を蒙っている事が表われている。所がそのままその English Equivalent を "I had Mr. Tanaka telephone"とすると、この英語の中では、必ずしも迷惑を受けている事は入っていない。日本語で「かけられた」とあれば、それは、"I had Mr. Tanaka telephone; [Although I did not want him to call]"という事になる。であるから

- a. 田中さん から 電話があった。
- b. 田中さん $\left\{ \begin{matrix} \mathbb{C} \\ \mathbb{D} \\ \end{matrix} \right\}$ 電話をかけられた。

は共に、いずれも"I had Mr. Tanaka telephone"になるであろうが、日本語の a と b の意味は違う。逆に"I had Mr. Tanaka telephone"なる英語は

- (1) 田中さんに電話をかけてもらいました。
- (2) 田中さんに電話をかけさせました。
- (3) 田中さんに電話をかけられました。

となろうが、それぞれの意味は

- (1) He did it for me.
- (2) I made him do it.
- (3) I didn't want him to call.

となり、そして「田中さんから電話があった」は、"I had a phone call from Mr. Tanaka" であるわけである。

英語では又 Active Voice から Passive Voice にかえる際、例えば

"The Maid opened the windows." -

The Windows were opened by the maid.

と言う具合になるが、これは主語と目的語とが互に代っただけの関係を示すが、日本語では、「窓があけられた」と言う事と、「女中に窓をあけられた」と言う事は意味が違う。後者に於ける日本語の意味 の中には、<u>あけてほしくなかったのに</u>、<u>あけられた</u>という unfavorable shade of meaning が含められている。それ故、<u>まどをあけた</u>というそれだけの事であれば、実際問題で、日本語では、受身の形で表現する事がないので、それは "The windows were opened by the maid, but I did not want them opened" の事であって、ふつうは

"The windows are open opened "

「窓があけてあります。」

"The windows have been opened"

「窓があけられてありました。」

窓があいている状態なのだという事になり、英語では受身の形であっても、日本語になると唯、 単に状態を表わしている事になる。

1. 「運転手が遅く来た。」

The driver came late.

2. 「運転手に遅く来られた。」

The drever came late and I was annoyed: I was unfavorably affected hy coming late on the part of the driver.

ほどに意味がかわり、日本語では unfavorable shade of meaning があり、いわゆる迷惑の受身となる。こうしたられたの形は「人」が被害者となる迷惑の受身の例である。そして、更に

英語では自動詞が受身になる事は絶対にない事になっている反面,日本語では自動詞でも上述 の文(来る)の他に迷惑の受身の形が出来る事を知ってなければならない。

- 1. 家内にねられる(ねる)
- 2. 妻に死なれる (死ぬ)
- 3. 子供に泣かれる(泣く)

又一方英語には「驚いた」(to be surprised) とか、「よろこんだ」(to be pleased) とか言うのがあって、形の上で受身になっている事も知っておいて便利であろう。

I am satisfied. 満足している

She is pleased. 気に入っている

She is delighted. よろこんでいる

He was surprised. おどろいた

He was drowned. おぼれた

A baby was born. 生れた

Eleanor Jarden 女史の"Beginning Japanese"の中の Part I, Lesson 20 Transportation の中の Expansion Drill の箇所 (p. 381) に、左側に英語が載っていて、それをみながら、日本語で Expand しな がら練習する箇所がある。英語で何て書いてあるかを言う前に、日本語で Jorden 女史が学生に言わせ様としている部分を読んでみると、

- 1. あいませんでした。
 - [He] did not see [me].
- 2. 出口で待っていたからあいませんでした。
 - [He] was waiting at the exit so [he] did not see [me].
- 3. 友だちは出口で待っていたから逢いませんでした。

My friend was waiting at the exit, so [he] did not see [me].

とある。この「あいませんでした」という日本語から、吾々日本人が思いつく English Equivalent は何であろうか。恐らく日本人なら、

"
$$\underline{I}$$
 did not see
$$\begin{cases} him \\ her \\ anyone \end{cases}$$

であろうと思う。が Jorden 女史の左側の英語は [He] did not see [me] となっている。これを英語国民と日本語国民の心理的違いだと説明する人もある。がその同じ Jorden 女史は、同じ本の別の所で、精しくは Part II, pp. 352-355 の箇所では、"I saw him, but" [学校であったけど] となっており、吾々日本人からでも素直に考えられる対訳が使われている。つまりその前後の関係で異った事情から、この様に異った Equivalent ができてくるという事実。 Jorden 女史の思い違いではないと思うが、[He] did not see [me] という英語からは、日本人は、恐らく「あいませんでした。」という日本語は先ず第一には浮かばないと思う。吾々で

あったら、"He did not see me"は「(私に)気がつきませんでした」。更に次の殺階で「出口で待っていたから、私に気がつきませんでした。」第三段階で「友だちは出口で待っていたから、私に気がつきませんでした。」と言うだろうと思う。そしてこの際、この英語に関する限りは、この日本語でも通用するわけである。もっともこの Expansion Drill が、「あいませんでした。」と言う言葉を練習きせようと言うのなら兎に角、Lesson の目的から考えても、「出口で待っていたから」を練習させているのであると思われるので、若しそうなら、つまり焦点が「待っていたから」にあるとすれば、チョット考えさせられる練習問題で、でもあるわけであろうと思う。

大体英語国民は、例えば「一緒に学校へ行きませんでした」という様な日本語を与えると、 第一人称を主語にして言わない傾向を持っている事に気が つく。「一緒に学校へ行きませんで した。」を吾々は、"I did not go to school with him"とか"I did not go to school together with them "とかを期待している時に、"He did not go to school with me"と か "They did not go to school together" と言う風に言う様である。「毎日勉強する。」な どと言うのも, 我々が考える "I study every day" ではなく, "He studis every day"に なる事が多い。三人称で言う傾向が強い。こうした、日本語の主語がきちんと与えられていな いものは主語が I になろうと He にならうと、You 又は We, 又は They になろうと, か まわないわけで、前後の文脈がそれを決定する問題ではあるが、文脈なしに、とっさに与えら れた時に, "He studies every day" といった様な三人称になって現われる所が, 心理的に, アングロサクソンと日本人の相異を現わしていると思うわけである。こういう風に、二つの違 った国の言語というものは、厳密な意味でお互に絶対的なものであって、対照してみる事は出 来ても、どこかではみだしていて、きちんと重なりあうものではないと言うことであり、言語 はその社会が生んだ産物であり、その国民の Philosophy の現われでもあって、社会機構、文 化乃至 Philosophy を異にする結果、生活の仕方、物の考え方が異ると、当然言葉の構成と言 ったものが異ってくる。同じ英語でもアメリカ人の米語と英国人の英語すら異った表現が現わ れている情況であるから、まして日本語と英語が縦書き、構書き以上に、語順の相異以上に違 っているのは当然であろう。物の感じ方、考え方が違うのであるから、異った民族の社会の産 んだ産物である二つの国の言語を同じわくの中に入れる事は出来ないのであって、この異質の ものを,その中から出来るだけ相似のもの,近いものをみつけ出して対照してみせて,判らせ 様とするのであるから、対訳はなかなか困難な仕事であると思う。以上対訳の問題点の範囲の 一部を提出させて頂き、この稿を終ろうと思う。

I A ──ではなくて"not but"

- 1. あの人は 中国人ではなくて 韓国人です
- 2. あの車は 国産品ではなくて 外国製品です
- 3. あの色は 黒ではなくて 紺です
- 4. あすこは 静かではなくて うるきいです

- B ──そのうえ── "besides"
 - 1. あすこは 静かではなくて 暑いです
 - 2. あすこは きれいじゃなくて うるきいです
 - 3. あのケーキは やすくなくて まずいです
- C ――ではなくて―― "as-not" ――ではないので――と同じ意味のものとして
 - 1. あの人は 専門家ではなくて よく知っていません
 - 2. 私は 医者ではなくて よくわかりません
 - 3. 私は 教師ではなくて よく教えられません
- A not-but で説明がつく
- B besides 「そのうえ」の意味になる
- C ではないのでの意味であって as——not の用法に近い
- Ⅱ 泳げないんですか? "Can't you swim?"

日本人的発想

正しい英語

- (否) <u>はい</u>, 泳げ<u>ないんです</u> [Yes, I can't swim] No, I can't swim
- (肯) いいえ, 泳げます [No, I can swim] Yes, I can swim

時間	は	遅く	a	ても いいですか
かえり			b	なくても いいですか
お茶	は	あつく	c	ては いけませんか
コーヒー			d	なくては いけませんか
紅 茶		つめたく		

c と d の場合の答えは いいえ――いいです

はい ----いけません

日本語では、話の内容に対して Yes, No を言うのではなく、最後にくる言葉に対して「はい」とか「いいえ」とかいう返事をするわけである。英語では問(とい)が肯定であろうと否定であろうと答える側が肯定であれば"Yes"であり、否定であれば"No"となる。

- Ⅲ a お茶は
- つめたくても いいですか?
- "Yes"—はい、 つめたくても いいです。
- "No" -いいえ, つめたくては いけません。
- b お茶は あつくなくても いいですか?
 - "Yes" はい, あつくなくても いいです。
 - "No" いいえ, あつくなくては いけません。
- c お茶は つめたくては いけませんか?

 $\frac{\text{いいえ}}{\text{いい }}$, つめたくても $\frac{\text{いい } \text{です}}{\text{いけません}}$ No, Yes ではじまる答の Ending が, それ と一致せず

d お茶は あつくなくては いけませんか?

$$\frac{$$
いいえ,あつくなくても $\frac{}{}$ いいです $\frac{}{}$ $\frac{}{}$

問題は、aとbに於ける場合の様に Question が否定形をとっていない場合は、日本語 と英語の答の形式は同じ様であり、Yes, No の Ending がそれと一致し問題はない。 Question が否定形をとる場合に問題を生ずる。Yes, No で終る最後のことばがそれぞれ 正反対になる。

- a ても
 いいですか

 b でなくても
 いいですか

 c ては
 いけませんか

 d でなくては
 いけませんか

 英訳に問題がある

 **Negative form の時に、

 英訳に問題がある

 **Description of the control of the contr

上述の様な場合は、英対訳をしない方がよい。同じ様な用例をあげて覚えきせる方がよ いい

IV Beginning Japanese: [Dr. Eleanor H. Jorden のテキスト] の中から

- 1. a おこしました
 - a I woke (someone) up.
 - b おこきれました――
 - b I was awakened. [I was directly affected perhaps unfavorably by (someone's) waking (me) up].
- a こどもを おこしました 2.
 - a I woke the children up.
 - b こどもを おこされました
 - b The children were awakened, and I was annoyed. [I was unfavorably affected by the wakening of the children by (someone)].
 - a 女中が こどもを おこしました
 - a The maid woke the children up.
 - 女中に こどもを おこきれました
 - The children were awakened by the maid and I was annoyed. [I was unfavorably affected by the wakening of the children by the maid].
 - a 女中が やめました
 - a The maid quit.
 - b 女中に やめられました
 - b The maid quit and I was annoyed. [I was unfavorably affected by the maid's quitting].

論 叢 (第五巻)

昭和四十九年 三 月二十五日昭和四十九年 三 月十五日

発行者

電話 代表(三一三)五 一〇 一東京都杉並区堀ノ内二—四一—一五

印刷所 株式会社早稲田大学印刷所

委員

編

集

四小林 中 明 時 明 完

Tokyo Rissho Junior College for Women

Ronso

Contents

Philosophy of Anti-Pollution

Tsunemaru Iwamoto

Educational Problems in Developing Countries

Ching-han Chung

Reconsideration of the Process of Teaching and Learning

Fumie Tajima

The Translation Problems in Language Teaching

Kumiko Kondo